

建保二年八月吉日
大和文

淳風堂

1

秋出

秋
秋

秋
秋

秋
秋

秋
秋

合

暮天
暮天

新合

建保二年八月十六日

秋鳳

秋月

秋露

秋月

秋雨

秋鷹

秋霜

秋水

秋鹿

秋花

秋水

秋鴉

秋霽

秋懷

秋意

秋懷

秋雜

秋雜

秋蟲

秋祝

秋旅

秋憇

秋鳴

秋雜

女房

順福院 作者
僧正行意

冬藏蕃原朝

乞宣家

隆

一

日

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

丹後守藤原朝光範宗

皇太和宮參文俊成安

讀研

講師

判者 参議源原朝長宣家

書記 諸國子書

外記

大卦

小畜

否

蠱

蠱

大壯

夬

泰

蠱

賁

晉

否

蠱

蠱

晉

否

蠱

大畜

否

一畜

林風

九陽

宜家鄉

往來

見

見

有家鄉

有家鄉

有家鄉

有家鄉

有家鄉

なづきはまといひすとほとすとくふす
うそえひを初ひすうれいをすばしす
さとやしゆえひを初ひすくわくと上まうすき
うよんを仰ひも嘗すましむふのあすもやう
りときともわい仰称いたる能

三番

た持

家隆朝に

もしらふ人をまわすのよれどくの事とく続か
右 雅詮羽毛

みゆれ在乃下陳をひよんすりふをれ秋色をゆく
人をまわすのよれどくの事とく續かすとよ
河くあへふとまじふかそれれれれもまちくと
一曲 仰ねことどよむとす、おややけ

四番

た勝

僧正

ちよしきぬあひつれにすくふる氣れ観

右

通具羽

あきをとれかととひと病のとま小秋常々着せえ
あれあれととよ半袖をむいてしまに乃す
秋やくととひとまひかうと侍するかくえ
侍ひとひ侍候しとあくとめよと松たる能

五番

た勝

乾家朝に

もよれづまじれのよしのりの風のよろがせば

右

光家

ういのとく葉よはくとくのひよくとくとくの

たすを宣仍書

畜 狹弱

た猪

家隆胡だ

とを先子つ神づる乃玉了されてももあまれ白馬

畫

右

通具御

やれ也のいわばくわゆきうてきくとあと嘆がる
なきむとみす神かよまうて居てきくふじめ
ほくともも不よしかあまきぬ小行つかす
ひふとやあ寺どアテケんをあしたの壁に書
化色ほくとりもあらそまくよいくまくわ
侍とはたのめ、おとよまうとくはあやむ

士番

九勝

傳正

秋あ風のよきむかひのう五被ふむきくさ

右

光家

あひりくわくはくかくかうつる玉すきとしらじの
ゑすひろとぬ神ふまとさうとゆゑのとまと
かわくやにれどくらくるえ侍く小ち玉らむり又
畜アフルタケアリトトゆえゆく御隠れた九勝

翁

た猪

女房

少と山乃りりやのいれこといし放ふて、れのまく房

右

荒宗明だ

秋年やとまう川原のちりよし神にあはれのまく
尼石乃落のまはらひすまゆとすくわ

右

わや侍

九番

た

豆家卿

神めくあすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす

右筋

恭

雅誦胡に

もううく萩のえりも萩のへとすゆ神ひ久高
なほすすりもきもきわきききききききききききき

あめほれりき、不似か右そじそそそそそ

十番

た勝

有都卿

タクシヘヨリモレニテトモアリ半角をかてよ続

右

俊成卿女

おもわねあこがわいきくさんとわいよ神よまくすく
仄よまれつてふうひとありやくくくくくくく

十一番

秋月

けりれ右とくもとねといづきとくくぬとくにや
もとへらむとくわら

右

雅誦胡に

なほすいみのりのくろ乃舟、とあくはくとくみ
あくしえんじとやくわをとアキアラクアヒ日をく
ト高そいとく御くいひくまわて舟入よ左の道りや
こもとすもとのこね五意とくまうちがくわ
えんからくわやくわくわくわ

十二番

左勝

通具卿

れをすうじきを

神ひくわくのあれかまと

右

左危家

やへも雲をうじし林風りすくけひゆる月
とうきよも神よすいうちてけひやおしん
わゆゆふんえひとすくともりこひめ
こくや伊人於たの居

十番

左勝

家際別

あくにてやまとえのまほくも成る月より
右

宴客郎

いじきよきみじいえいとゆく月を下
ト喜なれりよもゆ小竹がむの勝

吉番

左勝

僧正

かくされらうすうのむりよかきよる月のて

十番

俊成郷女

君の娘と月のむりと方代をせりて元にすわくみゆ
左とよひてたゆのあくとむけう小右衛門
れと月とんべれてけとあが光とわざて
すつまいうけんむれやねたの勝

十番

左勝

有家卿

月とよせよせよすく小方代わく月と林乃はと

右

光家

今雲のすくよみうれ林風小月ともかわとんと
そあとよくもととおれとすくよめとけう
よぶんうくが月とくよめとけうとと

うりはまくひのうとくに半もひてやむん

大畜
秋雨

九
持

傳記
卷之三

七

雅經引

風もさすがにわらせにひそんで空すきのむちを
右手空踏兩脚落葉窓深不知すがまもるすと
ありあられてうるさみ小竹そたの月あらしのめり、
しきりむかをうりてえんせびえひれに解
のまよや仕しん

七
七

1

卷之四

卷之三

卷四

通鑑

十六

卷第

家隆胡氏

卷之三

卷之三

秋水集

よしとくの事

うてアムナシ

すゑを仰んれまえもううぬよしゆくまえ
仰れんたわら

才翁

左 女房

宮本せのりりあやいそん風小そとおひのじ兩

右脇

有家卿

ひよくらタ書れだる雲、じて雨やく森へト高
乃や不思ひのまつて高はよ、すえわがさくみ
うきをシヤドウふかひをすむと景氣だらん
ちしてけれとわ居

才翁

元

老家

さやれあや庭をまよひし翁のあうとくさうの

右脇

俊成卿女

風下に宣うり葉ざれむるれどくねむり、三日霜
秋のえのきとくづよこつよまとくとくじにれも
たま高むゆくえ仰くまきよ、つひきくアヌえ仰くま
ね、もももことくずくわや、ねどくのゆにま
たふらううちやえん

才翁 秋鴈

左

俊成卿女

ねうれれ秋よいとまくに、布毛衣のきのうの袖

右脇

家隆翁

かりりねのきこゆ、や明めんれふすとすと有氣
あとのえひとくわうつきとや仰ぐつれ名
不うとうこめ、まほすうじやとまのせ

かくまきをひよぎれひすたまうど
しゆえひれわ脇

サ義

左脇

女房

詠そめふまう秋風のとうても風うち初冬の立

右

通奥卿

秋まぬ衣わらはれむをもしう廻りすとかまでも鳴
右あいりぬよいかねすもむなりひてくさ
わゆるし侍れたひとくよくよくよも侍る脇や

サ義

左

主家卿

あやうづられ波やどりあが小しきわざうはまの松

右脇

宿正

かわうねりまかれてましままきりしこるも
瓦のわれ波の波、うりよかな風ひまじよる
らんぢりきばをじまうすと音ひまもぐ
右脇よふとくわくわくわくわくわくわくわくわく

サ義

左脇

龍京朝だ

右

有家卿

かくまき風ひひてとくらむ波をまじめよ
瓦の内ふよのうせわらはれおまつしまひ
うらうせわらはれおまつしまひ
おまれとまじめのうふふう風ひまじめてこ
くらのまくらのうふふう風ひまじめてこ

左

草書

九勝

雅端砌

あきれちかわの源やとくらんくねうらす村せれえ

女

光家

ひゆひ、庭くわの子のゆわそくやまよとれ秋の全
たんとく、うれづらうもくとくとくとくと
けりれのふとみのねりりにじしやかねり
けのられ、今すこくうるもとまよもや
けんまみうちくつをうきがくくそく
けやくいた九勝

女書

厄持

女房

竹乃池の尾紀宮らくいふよわうさ先せきせき

手書右

有家卿

物もてねうだらうのれをやわやく神事あれ
はのせ風もうり、まともぬまのよふさくう、ゆくめ
くくらむせ小それとてのちとくいきくら
けれどれとじん、生の事理かうしての節

女書

九勝

信正

うきよもれす、だくまくもくまくもくまく
右

象陰胡

草やもきやれれれれれれれれれれ
な角、ゆきうきうきうきうきうきうきうき
氣りやくく、ゆきうきうきうきうきうきうき
おとひわとひわとひわとひわとひわとひわ

古希

た勝

通眞卿

高ひけむだく御才すきうりとをふわとれま
石 光家
私をながめらる原れども乃とかれと出でまふを
むよやかに秋のましよ正彷彿の晴れ

古希

た勝

雅綺胡長

月秋はるは墨してくも乃變れまくわや小ま萬
石 花家胡長
あじしにゆゑをひて秋乃豈ごろ高れ庭のきく
五首末小玉音ちさんゆねたすく秋の事
千春

た

三家卿

た勝

後成卿女

ういとねれじて山むれねよとさきとお君の父
妻をもーあのうときわがれにとくとくもうとを
せりゆうりとややん

千春秋鹿

た勝

女房

石

家隆別院

うひとひとひやくわく秋うひ乃はのふ鹿うち
あすみむじゆひそまおひてくまされられひゆ
すすすつゝ里よれりと猪ニテへくややん

平齋

九持

通鑑

むすめのうきよれども、風氣の花生す。此處行
き

五

雅言

かの金子もるの鹿角の内に林の木
ねうたをきのちのそじてゆくまえ
者なりと病れいふ心の向ふれむ
やうりん

卷之三

1

卷之二

左勝 有家羽仁
もくちゆのをひかへてはくとくのむらあむ停度のち

三

卷之三

シタラモリタマヨリアガヒテナシトモウキ
アキタマナシトモウキアキタマナシトモウキ

九勝

范宗明

あれの小片にて碑床

後漢書

時よりあわづ小牧にて碑庭の秋色見望
右 俊成郎女
うそとうひらもむらのまのまし冬をき音の難よ
麻乃らさわれ秋ノタケがふるやか。たゞもえ
かくにひのうてト何くすえゆい。ゆき

平
著

方
指

備
正

おひのねりとおもてを見る音にまつわる物
在 家即

あくまでもおのまじめいは麻乃とおもひてゐたが、
右のよろこびをもつてゐる

平
卷

女
房

神ひと、高乃の御子を、ゆてすましもあらぬ

在
復

嘆小ありうての不思議な小夜、うらやましきをはさん
と首もよしよしのうへ行かしの物

卷之三

六

まひ衣もとく紀乃の湯小屋をへて羽寄
右晴あけ後成御女ごせいごじょ
ゆふてらす神かみあわせぬ處ところとて秋あきの花はなが

卷八

後漢書

たるやむせんせりてあくまきりうぢよし
事ううじてゆゑゆゑんか化者ふくらむゆゑ
ゆふゆれを力勝

九

通鑑綱

右　光家

卷之三

卷之三

小萩は咲きすみ衣しじうこぬめてのじや被の羽衣
右下のよしめゆるのゆくゆのゆくもゆく
とゆくたとくすまくはいんとくすくと
なりておのねとくくおとくおとく

三九

七

歐陽朔

われくに取過よすりをす。かの病成宿也と云ひ候

右勝

花家湖

さういふ月夜はかしうめとわれば秋夜也

たびとみをすうすう月夜也。右月夜

えぬくわきゆく神也と云ひてすうと半月

山中さうのゆ生たる處

平高

左

有家卿

鶴もと飛也と云ひて又海に野鳥の名

右勝

雅經抄下

鶴見は壁敷をのむけと被しゆゆよう川の花原
あそびと2分又1分まれ神は有家卿

やくみはうつ病氣と云う。寛文抄也

平高

秋水

右勝

傳國

高麗うつ病氣ら多事わざくめと忠純公家

右

花家湖

うつ病ら多事忠純公家うつ病と云ふも
うつ病と云ふも病と云ふ事うつ病と云ふも

平高

左勝

家隆御臣

山の高もうつ病と云ふ事うつ病と云ふ事

右

有家卿臣

うつ病うつ病と云ふ事うつ病と云ふ事

右

花家湖

墨端

左脇

通貫卿

ありひしよめうれ松れよはきすくまちや又のく
右 家光家
あさう本事とゆゑ水の都にうきと林れん筋
うきと移りえんやりよまきくふるく行
あ之ゆ事た力持

墨端

左

三義卿

松れくよくすくすくすくはくく水
右脇

雅経別

萬ね河國のうれよもんてなじよき竹の流つて
平一のうちよき竹の流りとゆじてかくむれもる

墨端

左脇

女房

今まねと井乃きの里の山とくともいくよるゆう

右

俊成綱女

ふくよしゆくやいくくはづくよ耳派よ林の日敷を
あ育下向おんじりすますよくわいのひわ持

墨端

左脇

女房

翠葉のあらこすよ玉翁のまくら松小林のうそ

右

光家

初春乃不すれゆきありとひねれあるれももよ
紅葉乃すこすくすくすくすくすくすくすく

翠葉のあらこすよ玉翁のまくら松小林のうそ

罕畜

た勝

信臣

みかづれつまよふと、三翁のてかぬま山小おもむ

右

俊成御女

をほすよ、氣とかく神月夜乃花よ秋風を吹
神月夜乃花よ、ゆゆけと佔ひことくらひん
子喜彷彿よやつまよおうの裏わすと、方ひどよ
うくわきを照へ

罕畜

た

家隆胡

すすりぬれ、秋の胡のゆき也か秋初

右勝

雅江胡

暮もじの風のあくと、もす神すの秋乃初

罕畜

丸

宣家卿

たしもものはなしをとつて、ゆえゆと石とと
来いあいのわらふう、こまきむすすす初霜もとくえ

小すく作るの勝

彷彿よのそりとれ、おもととけつ、まくはる

右勝

有家卿

素多く是の席のさむ一色のあすてもとて、
たまうとまの種れ詞よ、下衣すむ一色の秋
月うとく作るの勝

罕畜

丸

通具卿

りあぬ方れまく、小れうとく小やまとわらひ衣

右

花宗胡

ひよし義よりまきしすととむ和義自引七月
辛酉たの方多めの左心とひのれい九秋乃秋の事
かすもあともひのれを傳とむくをふくこ
ううれえほくねと石相似物もやうん

辛酉秋祀

危持

有家卿

辛酉代下りれ秋風吹初くさびと秋の事

在

信臣

あつてんよられとり林ていくすもいはりまきを表
五首の井の小あれぬれし戸がくわわ持

辛酉

左林

定家卿

辛酉

左林

定家卿

辛酉

左林

定家卿

花宗胡

辛酉

左林

定家卿

辛酉

定家卿

辛酉

定家卿

辛酉

定家卿

辛酉

左林

定家卿

辛酉

定家卿

辛酉

左林

定家卿

辛酉

定家卿

ちとれけむトトカシ。うね波よれよしめみ鶴

ま右脇

通具卿

志ばそられきよも。神の哀ゆづわをめ
たらよのじみすの候。身のうじよのま
まくたまわきよも。たかく。おおきまちのま
晴けきよも。

辛畜

た持

雅経胡た

神はすすめす方のゆ、浪よもとをぬ。おまづさ
あめぢりり。水のみとのおもとをぬ。我有が
おまづさ。おまづさ。いれ。あく風よもと。又甲
は。福よまづくゆん。

辛畜秋旅

左

家宣卿

さよよひ。ひよりれむ。よりえと遠のむ。まえ
草をすしや。うひのまく。おと。寝たる。まく風
ゆふとは。かく鳥と。風と。草とある
まく風と。まく風と。まく風と。

辛畜

左持

通具卿

おひり。神よ。うめ。まく。まく。と
木右
月よ。ひよ。まく。まく。まく。まく。まく。
万葉のまく。まく。まく。まく。まく。まく。

の牛のあくすりとつぶすんいをもよおふ
わねの腰廻りをくわやぢん

辛夷

左翁

女房

高たかとくそに牛じるんすれぬいの牛じる候ゆえ

辛夷右

范宗朔

ありやあましりともけぬ寝てもよそうち候
ものよしのうれ候りタ書えん小字とゆふとまえ
りひかみいくと見てえみはるとおりるん
とこりうく候せとゆよせれよぢよせん

辛夷

左

光家

うるや勝承のまへ秋風いしもわげる喜れ

辛夷

右陽

信臣

せりむじのとさう高のすううき野にけつほそく
たぬみせんとけあけ風をとどめずく
くまくまややけくはは乃すかくはせ

有家那

左

俊成卿

あらすじのとすやいふとす山のそりや秋の風をもく
あらすじてよだれ返もくあきゆのひやあきの
たうや林とう草をもくやゆんあさをくね
あらすじたゑなーせんたうりはり

辛夷

秋憲

た勝

女房

主めあ風の育れね爲まほに御ね人をもよ
者有右 宮家卿

きじきぬらうれやあうそ愁うるふうじ
凡の育れ秋の香まほにたくゆせと力居

空番

た松

光家

きじきぬらうれづきうきぬれをきて金うりの錦

右

俊成卿女

むきがけい共りしよせとひふまほに時多きをも

空番

た松

通具翁

主めあ

あはれをやかく今えのあれすう月すが

右

家隆翁

あがちの松やさらもしげにりてよみうる
まれづきしゆうね月がさもなれかよ

空番

た松

傳正

主めあはれぞれうきのあうえ月をもす

右

雅

見よまよし道のり死、とれの下ま
左右にとく小よしゆくゆも侍多川有風じ
ともぬすまへあくべくすくすく人情の爲

空番

九

有家鄉

右勝

龍溪先生全集

まで半々意せぬ神の音とどきとすらり秋
右勝 范宗朝
かひりてきを采りしも彼を祐されやれどよし
左山は仍る右が下ゆくあえし勝ちふ

平齋秋懷

卷之三

女高

秋七月也升れしるゝこゝも生れむるに
准豆月也

卷之三

卷之三

左の手は化粧とし手筋でさき
まゝ下りてゆくもやもよとして
筋の筋肉とよそよそしく

卷七

九勝

卷五

七

家隆胡卜

今やどろみも無事すと色面を含んであらず
右　象隆翁ト
いわゆる身をひからせがちのくら辰もくねむりのあはれ
ありありのすともすこどもかくまくひけた乃
ありもよもぎよそよそくもてあはれ氣とせしむる

卒
卷

范宗炳

卷之二

右後醍醐天皇の御代記の前編と云ふ。左は後醍醐天皇の御代記の後編である。

たまうとてあつれりとくもよほのよしる
れおとすかけいとんがきとまくらしきを
まくわらひたる

卷九

五

有家網

右 室家御
老母もおひすくのよがれとあわりの育てを
あきらめ老乃哥小角りりんやうれい鳴
えいやゆくはまつてゆく你若勝ゆく

七
七

花
月
記

通鑑

初めよこうじの月夜の秋山

卷右

光宣

九

卷之四

是爲國也。故能無失。而人主之失。則多失於私。私者。人主之私也。凡人主之私。必失於威。失於威。則人主不威。人主不威。則人臣不敬。人臣不敬。則國危矣。此皆人主之失也。若能無失於私。則國安矣。

三

卷之三

四の三月さむかく、書つてはあんちうらん
かの年うりとくわく、くわくわれのわ

卷六

ち砂れねみも月今トのむすりも先づく

さとおとことしのとくふく小葉あらまよひ

古

左郎とひきとしのとくふく小葉あらまよひ
主にちかにわのむかう右門れのの男たすこえ
かわすすり

平高

左侍

通具卿

ひきとしのとくふく小葉あらまよひ

右

有家卿

人さう業ああとてかわりていつみじめ林とまく
左り肩領のんややん不すふくやん右
いづみやうれ林とまくしゆまつやく筋風
不むの

平高

左侍

雅経翁

竹のととかりうしとみよまれよひのと神とまく

右

光家

吹まよますとひよき秋風にせよひの神のあふ
たのうひとひくとひくとひくとひくとひくと
ふととひぬうふひせをうねとひくとひく
すとひくとひくとひくとひくとひくとひく

平高

左侍

象隱胡

嵐吹布れ被物はだりとあるもとてね林のメル

右

後成卿女

あきあくやくもとく風下秋月すね林小葉やく
たうわくらぬみとよゆくすくゆく下右

乃手心の神小豆やと豆を手に持すもん同
じやうてはいふうもえも爲はれん

れてゆく仕事の筋道

主書

主書

主書

寄合

貞永元七

光明峯寺持政家

題

寄衣懸

寄鏡懸

寄弓懸

寄玉懸

寄枕懸

寄常懸

寄木懸

寄造懸

寄船懸

寄綱懸

劉哥人

尼方

權大納言基家

右末ノ努力爲家

共那御前實

長家朝長

春宿權文良實

前宮内卿家隆

資李朝長

木氏朝長

親李朝

智家

中官少将

右方

民部卿侍

信實朝長

隆祐

行終朝長

下野

三位知家

判者

權中納言室家

權中納言

寄衣惠

權大納言基家

右持

えりゆせりゆきよめの衣うちをえてひのん

右

民部卿聞侍

山姫ひやまひめの衣もこれ年としもやいぬ

名申

春官權李良實

えりゆせりゆきよめの衣うちをえてひのん

右

權中納言室家

秋葉あきはの衣もとまひひ神かみをとみ神かみをとみま

名入不破中卒。中卒麦草、雅う歌秋草。謂之也。
申く十時秋也。隨時有共。兵て即被宿。宿九處。
衣着は乞有不因。祀皆も。可也。勝之也。申

三番

丸勝

東勢高家

モニ高乃て。まわりあり。申す。さく。此神が子
右。 信實朝。大。 信實朝。大。 信實朝。大。
す。 魔。 も。 申。 し。 衣。 く。 う。 行。 て。 き。 み。 く。 す。 申。 す。
五。 方。 兵。 不。 破。 祀。 有。 感。 気。 家。 長。 利。 長。 中。 て。 海。 墓。 開。
衣。 不。 誓。 申。 祀。 雖。 侵。 し。 不。 般。 た。 用。 衣。 く。 申。 祀。 長。 良。
有。 申。 諸。 有。 申。 祀。 長。 良。
味。 有。 く。 独。 同。 て。 申。 祀。 乃。 能。

四番

左持

六官内卿家隆

いあてゆき。と。う。乃。く。ち。れ。れ。り。い。ま。よ。と。ゆ。

右。 定俊

おり。三。れ。じ。称。こ。す。く。よ。の。う。衣。う。づ。れ。り。こ。ま。ち。
漬。と。衣。奇。え。回。り。て。乃。く。り。へ。く。ち。れ。く。の。殊。勝。也。は。
座。因。感。歌。説。師。不。奇。し。称。こ。す。く。よ。の。下。衣。う。
ひ。つ。れ。す。き。燒。す。り。も。燒。燒。煙。な。衣。小。可。勝。
す。で。依。相。合。維。為。持。守。唯。常。持。也。被。定。

五番

左持

美濃郷成實

紅。乃。と。き。か。い。ろ。く。し。う。す。の。袖。乃。す。き。と。や。き。れ。え。

右

隆祐

さ。れ。い。と。你。ね。表。光。秋。月。と。う。お。し。つ。そ。う。主。を。い。
左。手。お。端。絞。け。て。深。厚。優。也。本。ち。と。い。わ。よ。ん。そ。色。

や又可れ翁は定中

寄

左

資季朝左

月草色と白すり衣ありてのこかうれもあらじゆけかる

右脇

源家清

かく衣被の匂ひそり共に小布のすりうちを以てや
左脇とく向もありてすゆ中下仰上に右又
よしやくほましれ十首の初題小布ともち
きどりぢしん侍より左やのむ

寄

右持

象長朝左

けくわあすか袖乃源代承引らすもまてのういかせ
右

行祐朝左

えれ衣かりぬすり衣きぬし袖れどり衣まつをとひ
たすもほれおれ引くらうんととを衣をとまとふ
なりいわゆるすり申袖すりとれめうと有る
又優うみか小ちての侍

寄

左

楨氏朝左

とあたごかくも衣のゆきとまれまちかくのうる
右脇

中宮坐

わやむすりぬすり衣うちまつすり成るるよども
まほくうちしあいだんつよ返衣のゆの安
きくつことよんくわゆきとくとくは小國のゆの侍
九番

左

資季朝左

ゆきのうもく行衣はきものそぞろみのとおち

右脇

下野

まに見るのふ袖わしてあうむぬじれくて
浪うり衣をふ取とひぬまかくす車も
ゆきぬりアホうれきぬやせんを衣をすり

とくみ脇

十番

左

智宗

おれよこもあぬく風ふきやれどくわせも
右脇 兼原

おもよく身ひうちせとれゑ衣うれし風ふき
左脇 有右手うれをゆくて拂小優
みふくまくれて脇

十一番

左

牛官少将

いふもねこしきよひくおれ本し称を

右脇

五三住家

唐ういやーいの衣もよし、あうね原の風うきぬ
左脇 小うき名、右れやーうれふされと
あうねほりまうけんうん珠小豆すみを力筋

十二番 寄鏡懸

左

九葉大納言基家

よしゆの石井のすみのめぬ衣可せえ

右脇

医師卿典侍

うゆくよすてぬりえ乃氣すて風うきや
舜のあわしみうれう(おとつまゆ)は

中や竹林の洞へてくらやかとすらり

一寸のゆきの申して勝とうめうる

十六番

左

奇富羅奈良實

あさごさんねみづれ浦のすす境わねすとしき
右脇 東極高納言室家
引水の花のくみけり新ししれまんたけうつやまの
二見乃浦れますりみは内陸宣傳也下侍
東みよと右寺下勾狂忽卑賤小侍と像拂氣
又右脇

十七番

右脇

右葉勞為家

足をかる聲とものりこそ新すくしててすけ下ちして

儀實朝長

よそまとい乃涼すすりますが凡而新えふくよえ
右脇 優小侍。うそさすとの間すうくい
きあそび下侍と被立

十八番

左

前宮内卿家隆

あひんくよみをもわん下守りこすはくれむ

右脇

忠俊

ちややちもじうれり見事すと多ががれり
右脇 ながむゆゑ興あひくは小侍とお後後とくく
むのひこときとぬかれいわ脇

十九番

左

左近御成實

。

ますりて之を以てましめどりもがのをひふ

左

隆祐

まをかんじきねやとれはやうらじまひとけにせ
日ぬあひだされ候。右脇肩へゆ

左肩

左脇

貢季朝長

照月のますされ見立御と候。右のけ冗談も

右

源家清

かた山じとすみあれうてこらうりやあれ
照月のますめりくまくくゆゆとて晴
ひる太寄とむつあひゆ

左肩

左

家長朝長

あちり見立さかかきとらそとくばまくねねまく

右脇

行徳朝長

ま半綻うつりしわとくわあぬけもがくあ
左風情あり共具あくゆく人ゆくと左
ひりやくくすり仍為勝

左肩

左脇

頼季朝長

るよもよほくすくすくすくすくすくすくすく

左肩

中哀但馬

あひの氣おもてぬふりだるかと今がとよえ
左宣きう被立てあ勝右手に腰小笠下

左肩

左脇

貢季朝長

まもがれとあめられ浦乃名をうにまくわげよも

ま右 下野

うりはらへてもやもますひんわかりとくふれ
あら お首引ひかくもひきましゆきとわ持

古畜

左脇

鷺

アモシカムとくらへてひむれめりとくら
ま右 荊康
ますひんうれうりあみり秋ノ氣氣あもむけ
そりとく後らくとくせやはくややトカ
キテウチマハのこじる看れておすすじ
侍はれぬ右ま共罪すくわく

古畜

左脇

中官少将

下次か見人被用とよとひかいまさるみとくら

衣

正三位家

かくこりあくひなりとくれどももゆくのく後

お首と背先可わぬとく定よき

古畜 ちうる

九度大河玄奉家

坐りのこわぢれのとくを小つて今まくままで

右

医脉御園情

ともりあくらねのとくが下んのまくとくま
右方アニ右口あくらねまのとくにけんじとく
時雨のそめりんむ煙乃木にけんじとくをす
侍はるまえ家アニあくらねまのとく

まつうとうひやうきにれりやうへりよとおれ
ももすへしくそとけてやうへんせん
秋のゑようもじつわいこちくに偏へ時雨の
津梁乃き紅葉月當ひは星為樹木え名
字を送らむとく船旅之羽像を無事奈勝作

唐書

左脇

春官權吏良實

凡のくれゆ比のまひすま半ともみづなるか小ねえ
右 京極押納言宣家

かわらしもやもあらふらややまとまな用のよひ
あてられ下ゆすまきつこのきをわらひゆ
てふたわ脇

五番

左脇

右勢勢為家

右

信實朝に

松川ふすとらうぬあいさうすとひとをまほ
右奇母猪車亭有明乃すもやうかくの鷺

五番

左

前官内卿東隆

右

まのうじうじう路のまのま葉うわなゆれ小音と
左内中さんふうつうゆをゆり一アヌりきの
まのま葉うわなゆれ神かとねとてうりうりう
ゆりうふらひいまのと常によんううわよあ

せき

左

共御御成實

ありきうちたこゆ

右肺

隆祐

ありきうちくぬの川河財とすくあわさむはえあ
右方を表致生田の川からもれんとくすゑる
あひ可肺えに申

せき

左肺

資李朝長

ほきとそうさんとそそあわのさうんよくとねふれ

右

源家清

人をうちねりやとまのますよひてあまきしうち

者よりとみゆきちすうれと人をとり立字
今いのこすもあく安ゆゆく被作下ちよびく
あまととは理府左邊るゆく被左勝

せき

左肺

家長羽長

右

行能朝に

ちようち金きれどりもすいてもすれ裏られひがく
ありとゆもあうじんまへ祀かれにて弓も乃く
をきくじくらはれとも要すかのうつぐくま
可弓弓被え

せき

左

賴氏朝に

おきのあいとれまやこもくすりあひたわらをま

右晴 仲良但馬

おとあれどうのことせれあつてうんよんがくわや
あみひじるしおれをのあくちく
侵ふとうさうての船

左番

左 親ま朝臣

じゆすくよかくみとくねあつてうそとくにいわ
やえ

右侍 千野

じゆまくはつてうそとくねあくとくがくとくをひふ
左侍 駕馬右宣とくすてぬ脇

左番

左ね 知宗

左

あくちすゑ登れのまれをかれぬれとくをくと
右番 兼原
みゆらもむだりとくえきくみくみわくも事とく
お首依ヌ殊得失為侍

左番

左 中宮才將

およまうわよそくあくう入賀れ候秋のうぐ
右晴 三位左家

さくもよしむらうゑどあくううとく内行院
左侍 入てぬ晴

左番 寄玉懸

左

擴大納言基家

きくかづり神より、高瀬の、あらひひよ、とぞる。

右 電御卿典行

かしめどとて、もぐれつて、あくね神の爲をさ。

右、瀬戸田、向心小竹、力持

左 番

たけ

春宮帷奉文良實

角、みねりて、よ家称、さうさく、ほり、とれ、ま

右

京極守納言宣家

を、すか、かそ、れ、ま、こう、と、も、よ、う、と、所、せ、に、

左

左太主、室、名被、内、乃、の、所

左 番

た持

奈、葉、勢、ち、家

ひ、そ、そ、と、ア、と、ぬ、れ、ほ、そ、そ、と、す、り、ま、ね、

右 信實輔長
か、す、も、う、む、か、う、と、ゆ、く、神、と、れ、あ、ま、う、瀬、れ、を、す、ま、是
名、ニ、殊、車、と、也、ヤ、の、持

左 番

た

前宮内卿家隆

い、ふ、せ、じ、わ、く、キ、風、よ、そ、く、も、の、そ、と、あ、く、な、す、か、

右

忠、後

伊勢、小、也、不、あ、り、と、す、と、し、の、は、す、と、う、神、の、う、り、
行、徳、朝、ト、下、も、も、や、つ、キ、と、し、も、こ、う、同、可、有、只
而、外、右、み、む、宜、爲、時

左 番

た

先、御、卿、成、實

す、む、う、と、う、し、ゆ、と、お、ま、て、あ、と、わ、と、い、や、す、

太陽

隆祐

人をあせらうきしわうきすのれ神もしう遊む
たま珠御先をせらうきしわうきしの神もしう
珠よ宣すくゆうへ心因前もじゆ
右指うしやゆし

究竟

左

資生胡長

恵もんの源乃玉小刀のしつかす神一れ波もみま
右

源家清

さやくてももろこね神のは波れ教どうあまん
右う優小はよすりわじゆての音

平義

左

家長胡長

ものいきとくとやそりうちきの面鏡よひりまき
右脇 行徳朝長
あそりあるあらとれすらにゆく毛ねぐれてもすほ之
毛ひひかよせつゝまさんふよちとむ慈ふとかく
けのゆゆゆ筋

軍書

左

種氏胡長

人をれる秋のせりあむりせまがくじゆくゆ
右脇 中宮姐子

あくもそりやもきしりにいもすりぬりくましよ

秋のせり十三年小豆戸ゆへ織山宣れ七月吉日

乃事小やことよからんてゆをよとほしたむらす
れもしまくがつ家内よれよとほんまくねく

小かうひのすゝめ筋

平素

左侍

親季朝長

男うべの流はるひにむひのすとひやまさん

右

下野

やまとひの神の流はせとひやまほりひとひきん

左右の小便うひうひてあ持

平素

左

知宗

玉ひとみすもひりひまひせば一束もあひまじ

右筋

兼康

けいきも流乃うらやもすうりとひまひせのむ

左

玉経うりひうりうきく守然えんぐとおすよ

平素

左筋

平吉少翁

ひそきの流のあひをわらうひぬとのとくくへすま

右筋

丘三位知宗

ひそきの流のあひをわらうひぬとのとくくへすま

左筋

平吉少翁

ひそきの流のあひをわらうひぬとのとくくへすま

右筋

民熟研典侍

ひそきの流のあひをわらうひぬとのとくくへすま

左筋

平吉少翁

罕畜

大

春宮權委良實

まひひともちのれうとれあらやう秋共色をあひつ
右

右

權中納言家

まわはよみせれほのか就きむとま月りあく
左

まらすくめつまむれのくらへて深くす
右

ゆゆゆりてしゆくゆれぬ依附氣色を勝

罕畜

た勝

右馬つ替為家

右

信實別侍

まわれれれとりやあらんいよ新規の事例を
右

右

うもむくすくすくすくすくすく

罕畜

左勝

前官内卿家院

左

忠後

まわいさりやかとれふもすいとそねゑあ
差すれがれにとれすけれれれはまゆ送
いと依附力勝

罕畜

左

失知卿威實

まわいに被の波とまゆれなれすづちわく
左

隆祐

まふとまくれんじてまゆれなれすづちわく
右

れんじてまゆれなれすづちわく
左

アテム待

辛夷

た翁

資李翊長

人氣もももう波の波花とよもほひよりか

太

源家清

うきふくいもや称をわらうあらは波の花よ
波乃波花とておもへゆふくすくじも
や称をもとてうれすり波定たぬる

辛夷

た翁

家長朝長

君花すく淡のりとくす群のそやまちにかねのす

太

行波朝長

むよとあつこえりうすくはくわのあくまくに

太あ跡はくとけく称すくとくがくぬよれす
じらひせんととくや重拂よびりくあくすくわ

辛夷

た

頼氏朝長

神のう乃高木えりてすくとくれ花のうへくやくさん

辛夷

太

叶官迎

きの火舟とくあくすくよれのうへくとくと
音とあやうて傳かくとくとくかくとくとくとく

辛夷

た翁

親李翊長

源川とく辛くあくれりれとくの園とくあくすく

太

下野

草花うじひすくえうれとえわとくしおあれ

筆者不識其字也。而以爲

卷之三

左傳

卷之三

おこりますされれりとほそくおつもひき

卷之三

卷之六

お花のいろもさわらうじとておひなさん
すぢやくありますそれ花といふれてゆめとてお脇
の花

1

中
空
り
快

おまえがわざとおまかせをあたへておまえの心をうなづく
おまえの心をうなづく

五

やうぢはり

辛亥寄章憲

庄子

九章大納言基家

行は廻る洞のまゝにあひぬ中へけぬぢ
右 民部卿典侍

大

民部郎題

五首傳小竹子名下有詩

三

春官拉夏良安

まことにありとむじにあらへて
右 棟中納言宣家
ひきどり人づれまき下常はりすれ道小どもあいすき

七

指掌訣言宣家

辛
亥

五首力持

東の勢を家

きりれどりうち草あしのしましも反葉

右暁

信實朝に

りやれども常乃もうりとじまの葉にあやす
左守信小侍は初め家事とがくすとゆうと右暁

先番

右持

前官卿家隆

やうりあそをもむすねむらすされりみうじのこひや
ゆん

右

忠後

むらさきのころれむれむれとすしりてわら花^{ハナ}すら
むらさきのそらめのねむらくくもくくやくゆ

名下をむかわひくちとよかわうすゆ

よしてちか

卒番

右暁

七郎卿成實

えをみせりとむれむしとぬきもやす

右

隆祐

じうのとくにあれたいのくせてあひぬふうふくら
自氣番のむせさん色ふたと暮れの能

卒番

右持

資ま朝に

まうとはまうむの小もひきえす中今半

右

源家清

公のとくにれれたいのもすらにけりとよひもく
去るお首と銀鈴とばしての持

卒番

家長切片

志士の爲めに死んでゆく者もいた。行徳朝に

行旅朝片

あえぎれぬ小さくじひもぢやれぬにとせねまふ
ぬるよほんじうわいきりての船

卷之三

雅氏樂記

月年たらむすれの事にかかへり
太中官但るむすひもす一筆にそとあひゆふの升てや下革失くも
きを左傍小字ゆらう一ちよて力筋

東都賦
卷之三
宋玉
賦李朝臣

この内にさういふのくわいぢやんをもつてゐるやう

右
下
ト
野

元ノハシタニヤアシテ
トモヒテ清失の侍

九時

卷之三

せりのこせりとれいをまことにあはてよも若か
右 兼康

志士之氣也。蓋子雲之賦，其辭藻富麗，文采斐然，故人稱之曰賦聖。

左傳

中宮少将
大將軍

太
正三位知家

すれどもいもすときも前もれりぬ
入庫右右右腰肩

卒右寄承意

左腰
九条大納言基家

あねをやうやうもさかにらはまわしと
太

左系詞乃より不れよとがくわゆてわ腰

卒右

左腰
春宮權支良實

まかばむまきゆに元くまんうれぐとまくわ腰
右

權守納言宣家

ありもされどもうか面礼、キテカラまのらは
左腰肩と右腰仍の腰

卒九右

左腰
右主寄為家

あすきれ壁うじますううしきれとくの要れ

右腰
佐實朝長

さうこまくまくまくまくまくまくまくまくまくま
右腰
右腰

左腰
京宮内卿家隆

まつたら小内がいとよりかりてわキのとせんと
左
忠後

人乃きことよりて身にどうくすえゆりま
仰れぬ身の内身も身よきもかくて安んじ候
依て殊作力候

車馬

た持

七郎郎成實

あらねれぬよきわざして身乃ち身の形にあやむひ
太 隆祐

角り身の車りとゆひとよし身はまもむ
お首絆又お指方候

車馬

た持

首ます朝臣

きりひきれぬよびさの身の車りよし身行ひをわね
太 源家清

車馬

左

家長胡臣

あつてわられぬよりよし身の車りも身の形もあらじと
絆身うす身の車り難大切身を指高身又お指交難難
车馬

右

行健朝臣

ゆまきしれや車り難い身の車り難い身の形もあらじと
は身の車りありすたばけりて後れ身きこれと
身の車りや身の車りを

車馬

た持

松風胡大

うとうと見ゆまと車り身の車り難い身の形もあらじと
太 家清

仲宣他

なふとみうきすりあらわにゑれとくぬせれじとれふ
あふ可晴中被毛

车寄

左右

帆季朝庄

ましまさやかどしおもひとおなずれてあひぬのむへ

右

ト野

ゆくふえねむすりうりほりふあらんほとだる

车寄

左

知家

うしりあいれみゆひよめあうそやひそを龜尾

右脚

兼康

おとえんとすはましゆのわいとじまゆのちあ

车寄

白糸のあそをもつてきよすて晴

左

中宮少将

わらきあ等りもつてけられひたかとふ竹のわき

右

キのまき

びとりく並みもとすゑれうきよとまくふまつ

左脚

太亨

お亭りくれ河二句わがひすくにまく傳あわ仍

左

九条大納言泰家

うちつて衣かくともみふりんをアハヌモヒ

右脚

民部卿典侍

ぐまきを波の下にうちとせよ身をすゑ床の

平九番

右持

春官校大夫良實

並行兩事みのとよもじしろ様ありあきてひわかん

左持

京極中納言宣家

ありすせの處のりり行やしらもんまくてものを

平九番

た

右本ノ智為家

ありとがわいれ小内れ前もしはあはる神乃手やす

左持

左持病中中納右傳義宣家平九番

平九番

た

左持病中中納右傳義宣家

平九番

た

乞称うつやわえんじやしづとみよまれし等は

左持

忠俊

もうりやうれ東乃義とひそもうほどすはれ

右持

信實胡に

ひづよすせとめらじ風毛湖へ五日半也モ先に能

左持

人やあやがんじやしむろなりとゆの右文書を角

難者中依作右持

平九番

た

右持

牛飼卿威實

更にうち風乃立れとぞのとぞ

右持

隆祐

ちうい称の風りねに立てたにうち行こみのちしろ

右持

右持遣見教すとぞうじとぞ教聲教すやとぞ右持

右持

全書

左

資李朝長

もよひきくへ山の芳達をかみ外すよなもく丁めれ

右脇

源家清

きりまうすをうそとせひうち翁のふ達不はれ

左脇おほ小さきゆうじよとあらわ

全書

左

支長朝長

かくもとよきこれどかくされしりは筆まわれ

右

行徳朝長

泊未ひともうと床あやしら言れちしほす
右あや達うすすきどうじなますそあら翁
よもうとあやじいれふ内がた人ととい

全書

左

賴氏朝長

さもらひのわら葉れをみにまくしれ
右脇中宮但 やわらかう先ゆるやむる今、涼とひゆて
左脇小字ひづる左とひゆ、不直心を左脇

全書

左

駿李朝長

ひてもとおとせの了、自すみのろい柳浪に浮
右脇下野 ちよよき神々くらぬひ、けんじらわだつまく

左處すすきと下人御とも主事もあひます
にあつてやすりやむらき左主をか渭竹野と號
ちうさぬくとての勝

牛畜

左持

知家

もうち詠の事とあすらの事とふるのうんじと左
右 系康左主
キモトホシラノンホウアヤシマハルヨシモツクル
を殊勝方又左持

牛畜

左持

牛玄少將

うきわとあらわちむれ桂左主の
右 五位知家

源より庶れをすらるえもあらうてすまの役もあら
い畜人夫小便をうそてニ勝負

牛畜 寄帆窓

左持

九条大納言泰家

袖乃うつゆ風流左主のうてひくらやくわゆりのうひみ

太

医師卿西侍

小玉わげうとき外こうゆうめうていはまほひが
左袖乃湯左主の風流のむかしめうりのうやまけし
やうくアヘンゆうりや千アレに左すみと
れうすけうねをねふ勝負

牛畜

左

春吉指掌良實

ゆゑのくのとひうとくみづれいすね浪波

右脇

於中納言家

白翁ハ被乃浦かともくともあリ丹尼ヨキ海をもん

年ハ孫子ノヨリノ、母孫脇之也皆内アサハ

可可為右脇、白翁作

左脇

厄

左葉智為家

うき中ハ吉ガトキニシテ、ゆきよちねばれは小みしめ

右脇

信實初は

うち風乃多の辰風リルハ、ねすの海事モ

九子脇

左官内卿家登

浪ヨリさく人内んれあす休モモロシモムモモ

右脇

忠後

尼翁ももよこづ川の海モ、いわ、未モももよびれがる
人のんれあ、みまうちて、行ぬき、草シ、なすり、
人モ波同シ、もや、泉と、もく、ふりて、うも、泉

遠遠、山下の右脇

左脇

共御卿成寅

また、あ、ぬ、浪、河、と、魚、小、り、み、れ、風、か、と、じ、や、り、え

右脇

隆祐

岸、も、さ、れ、が、と、す、く、み、も、月、日、そ、も、こ、う、あ、わ

た、傍、小、約、う、（小、右、下、）思、意、不、通、ふ、便、并、上、

左脇

九子脇

いたてま丹生れ河浪よもふもからぬ身ひうきあひ
たりうへたまめあうむ力あらう門してわ窮

卒巻

左

中宮大將

はれくさりあらうふあねまとうしきれど無病
右

正三位家

みすし入鹽れ小舟のあそり小まとみ言を沿うる
左奇平奇れられときかへりす遊子や佐々
吉して右持

夏寄納恩

左持

九条大納言基家

正殿の海ちれあくしゆちりおながりさくもとめ浪
右

臣御卿典侍

志賀川海を納れど纏うだすすまくねうみ船を
名下ま取くじわ舟

夏番

左勝

春宮拉至良實

海人乃よどされ納乃と局とあくとふしゆのよ神や船
右

擔中納言定家

人をもとまみかとまく鷺のあそびいてしゆとかくらえ
左より納のくとあくと殊勝え田若ア右納不
尋たむ、たわ船

夏番

左持

東宮皆為家

あくとまふひまかりてまたじよむわらふみの
右

信實朝に

也とよきもあらず、空まで、川のよしをとむうことを
右首七殊事の行

百番

左持

前宮門卿安隆

伊勢八海いせはちかいえぬう

右ひだりいじくあれ、あまわめら

患後

多おほかわとこよ縄なわのうちとてんひよりととえねは

右殊宜ことに難むず者もの、依よ作つくりの行

百番

左

左詠卿成實

憲けんままの神じんのううににああれれふふととのの源げんまま

右

隆祐

浦うらの方がたととくくととくくああととくく角かくののややりりととくくえ

百番

左持

賀季廟かき廟

寶たから海うみのの朝あさくくるる小こいいくくわわととのの物もの、源げんかかりりそそううををすす。

右

源家清

かかすすたたくくねねええのの浦うらととくくととくく酒さけののううととくくかかくく。

百番

左持

家長朝じやうじょう

ひひ網あららすすゆゆううすすれれるる身みののままががひひるる。

右

行徳朝に

あよといひぬきるまくはくわくと細かくほんのりと細かく
ひめ入向

草薙

左脇

頼氏朝に

おまえをなめなみはさくひくとあまされぬと

右

中宮但

わ細れどりきめ小さくしてみよしにひくとくふ
下臣のりくとくふされての脇

草薙

左脇

駿毛朝に

おまえじうさんりくよしめとめぬよ人よも

右

下野

竹葉代海にいぬり不ひ細れよんがくろくえ
心きく細れよ不ひ精苟々

草薙

左脇

知家

右

兼康

うきく防海乃二やだく細のれとひとうこ
駒馬持へ翁日か

草薙

左脇

中宮少將

右

三佐知家

まえすひく細のれと魂うきてれよかくまき身
まきわれてよかく被りきてねとうなんの済

松本能勝集

左太方ノミノ波申ノ御不覺ムモト七旬老耄シテシタニ病腸ヒヤウ惄然スルスル暴
之傳方已迷惑ミハシカニ感鉤カツ杖窮カツカニ之筋刀難ハラカニ濟救シヨウ絶頭痛カツカニ精
興味後日称迷是非不能致子細シテ之可取其朝欽アサヒ

勝負丸方

九条大納言勝二持立

右近勝三持立

兵部卿勝三持立

家長勝三持立

親季勝三持立

春官拉査文

勝足持に

前宮内卿勝三持立

資季勝三持立

頼氏勝三持立

知宗勝三持立

大蔵

勝二持立

右女之

キニ

嘉慶三年二月廿八日申酉衣笠大納言殿御奉三月二日書字

同上一枝竿

正和五年十二月十三日成實院の手先ハサシをとどり風乃吉
寒一々雪ありシテシタニ自らえりうそりれぢいとぞれぬすら
よやこそれゆくやの月日はひふいとうよいうかとぞう
きしつれりやむりひたり

寺合 宝治二年

題

早春夜

山花

五月郭公

初秋風

海邊月

野翁雪

愁久意

逢君舍惠

旅宿風

社頭稅

作者

危

女房

太政大臣

權大納言源朝臣道忠

權大納言藤原朝臣宣雅

中納言藤原朝臣公基

中納言藤原朝臣為經

右某智源朝臣道成

終部卿涼朝臣有教

右近侍中將藤原朝臣師純

沙汰蓮性

厄近推中將藤原朝臣為氏

厄京後太史藤原朝臣經朝

和湯門院敏宗

右

美明門院小寧桐

俊成卿女

橘大納言藤原朝臣實雄

橘大納言藤原朝臣弘相

厄近推少將藤原為教

敬位藤原朝長信實

右近侍中將源朝長雅光

弁内侍

右近侍中將源朝長雅忠

少將内侍

沙汰禪信

前大納言藤原朝臣為家

譲師

判者

前橘大納言藤原朝臣為家

一
春
早
霞

五
陽

女房

うるし春をすりて天子あらかとすこもと山東風
右
承明院小室桐

あまくわいとれやアマツ衣川がもんじく(キモチヨシタケン
厄立首尾お町てん網花繁らすとふうう侍ふ
やれぞ奇衣川(まげり)くそりしてかりてし
用ひく厄立侍ふうふうかむよ西征ゆき
高いく(アシテ)事大(アシテ)侍ひて侍へまゆもと
八危力勝

左持

太政大臣

右子也一後成卿女

後漢書

君うちねよろけひるまれも小かすむぞうと明りの
夜乃ゆばこよみせんちのねよみこと
ほううへ下らもいそれゆみておうくゆうや
右ゑああをすばといてゆふまことくはれあ前
ゆのうすくそくわ藉

左 楊大納言源朝臣通忠

春風里
草木知
小鳥
大羽
振大羽
云麻原朝長實
左賄

たの毛皮を失つて、この形になつねうよど

卷之三

ねやにゆんぢやのすこすこあひてう

卷之三

左持

指大紙言藤原朝長之雅

太
指大納言藤原朝長公相

たかすらんとよれらえにひじよれてこはるやいうり

おひるのう春小高い木こうへあお小うちや
あいて併れのちうちもとえかりゆく又行

「おれかくはらしや大きき色う
すきあとも早春と云ひからん」とお詫
まりを下さりてゆき様とますて持て

九

九

持大納言藤原朝長之基

まよれ雪ひありて、胡麻をもやいにとももきて、
右　厄近づ將藤原胡麻為教
秀戸光明乃元がすとて、又あむ乃もふときひすり
厄害のすきり、胡麻をもやいことひらくに
ようくはよやたわづれ、光明焉んうれてゆれ
へもへか能

卷

左

にむかひて、

卷之三

卷一

卷之三

卷之三

たまきの御心を知らるる事無しと
見てからうらみの小物をあくじれと云ふ事
きらます。おほにうそせぢわざの左多都門
伊豆の三やせつゝをいたる處

七
卷

卷四

在東都見此題

右近侍に於ける源朝長雅光
ゆき翁丸弓の元のうち不^レ今^レ幼^レりう

左大元

2

卷之三

卷之三

1

寄

共御源朝に有故

ひのすとて書とくもかたは元明あらりてもやうす

右脇

左内侍

あれ原よりのをあうすよほせきもしりふともとくや國
五方雪それをいつれすか小さんじこれ行くぬとお
乃の度、まきうふあくとしてちすまつりゆ

九番

右脇

右近侍中将藤原

右

右近侍中将源朝は雅忠

あらひと風をすねとそかすしうすきは方をま
たねづれどくわのむれくもとしんじくわくわく

十番

右脇

沙孙蓮性

えよたまひ道とといせふかとひねかを
きすく小ゆく称とこれと脇を左小ゆくさ
右脇

下野

こうじとあれ衣被とそきのうそ井をうふと
たこわすくそあら原を井とうちにうどく
あらじゆういとが向よ今又行れいとくひて
く翁いとすくわとけくろ今のはれんとやがく
けんとあれ衣をうかうすくうさとよみそ
うちととくわとくとて目よくうわくとく
十番

右脇をまこと事行く称の右脇小ゆく

十一

古持

近侍中将藤原氏

卷六

少陵集

卷之三

尼京於委藤原御門經朝

下
卷

沙河雜記

卷八

明幼山アラモとカリテ也

卷之三

そよぐやくわくやくわくおとしは
とうとうわくわくわくわく

卷之三

卷之三

卷之三

卷之五

防尾羽乃家をもる日れ年よりぬよりの初去
前指大納言藤原朝臣為家

卷之三

尼翁と、門の日氣と乍らぬがの初共税云々

卷之二

アラハ御神不ほどうもよし年春いきかたり

心よりお見送りを申たひ候るに及ん

玉藻 仕合にあれば人の衣ふしれてきりとま
侍るを貢ひまつて

吉田山元

左脇 女房

足そじだむくろ床 さあ さきゆうひのひや元の跡

右 小宰相

雲乃うのうてよそらなきとれ代のやうれほ
たすくを席さあ かきのとゆらやく梅乃
きそら枝小んゆうへくわよ侍るを望のま
う事 こもれねとよん候乃むいとまくとくあす
侍も花室あいわ家とふとくふくう行く庭ら
こ有能うそんねはれ右ゆどもうう様花う
らすうきうちおしるういはうううううううう

十番

左 茄子大長

むりいそよ秋をじり まつ しちね花と袖ひびて

左脇

俊成卿女

春いまし花乃物とむりふすうこうに匂ふすうせふ
たぬと若とすうじふうとくゆくゆくゆく
そらくゆわなほ小匂ふすよ登れひ花乃物
つもとくくづうううううううううううううう

十番

右持

捨大納言通惠

みづくびのきつきのひうらく花よりを小匂ふ
右 捨大納言實雄

風を心そぞ喰まよれ尾とていまくちもあ
さくちふれひれ様危寄走りとてくわくをすも
本をももういまくえんね事にゆけむれどもりた
立あうてぬり白へばらうきゆく先とすもあまよ
あくわくくとやけん右すく、羽とみく
けくわくやうれすくとあくやうじくわくつ
うくわくひれとたと下向むけりのまむすくゆ
きくともちくとくわくよりてひれ筋とくきくや

老番

左

權大納言と雅

保

權大納言と雅

右脇

權大納言と雅

左脇

權大納言と雅

右脇

權大納言と雅

十番

左

權大納言と雅

右

權大納言と雅

左

權大納言と雅

右

權大納言と雅

左

權大納言と雅

右

權大納言と雅

十九番

九

中節為強

き見れ立そひれる海

右
月

信實刻尺

たあ良のやうもあすこにさひるまく侍り
ゑゆ乃山といふてよれて平野あると侍り、松石
お連信よりちと心といひあてて姿をうかが
まわらうとあれ行つるいちへゆきをほのむ
揆ふよつみて、それもくぬのあ、何んの

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

右近中樞雅光

日向の風に吹かれて
身も心もすくすくと
生き生きとして
生き生きとして
生き生きとして

卷之三

九

卷之三

まひくあらうがよ日暮にて山中すゑふもあらぬ

卷之三

卷之三

おもむくゆきの山をもと花をうつる
夜を死はせんすく羽衣の音を拂ひぬけ
てとくあたゞくさくまを拂ふき

乙
七

卷之三

サ焉

左林

右通中將仰施

至其山骨の黒れを以て一月し臂肉引ひやる

右

雅志翁長

御附山峰多死氣の氣をもててすま年此をもと
て左野山に生すアリ黒筋毛とて百日めに也
主事に之は初脉いはくよのとすそそく
アリヒトナリアリアリシテシ善勝頃不午後

立焉

左

山渕、蓮財

立

左

ト野

孫光

みよおれよまじく日のよそれぬぢえ未だもま
た今そぞ先ゆまくも見ゆきつづきをき御と先
ひよすわひれとあひうあくれとひれと
こうひよすくてひれ、今乃生まくもひん
めの枝りかとぞてこいか、元よゆくさんね
すくやうめうしてゆくよとむ

立焉

左

為氏

又

右將内侍

キニ

又う登れ花をじり生むすくと薦のひとと
ひとひうえさくゆと福くらひのうい
たうち生れくまくまくまくまくまく
や下白いあまうに下へんゆちうまく

胸をなまけてうりうちもやせぶりにれて
かたよく手をこねやうにゆきとれども、
てじた時仕事

卷之三

經期詞 十

卷之三

卷之三

卷之三

右記は様似ての筆である。景因の筆名すら見え
ぬ。太陽
山林禪信

卷之三

皮膚

越前

古文

九

女房

右

小室相

とあはまつみせりけに鳥ふりれてはわきてすを
立たれりうれていゆうひもととそ月と人をゆく
ひきりとひがんあさにめづくにゆくにゆく
まもんくひりまかわにまことれまほくま
ゆめなちうきもねりゆくゆくあは
あすやり衣をくられて五月のやがく
ほのあんとくはすとしもかたくすくゆくゆく
たる晴

皮番

龙晴

吉政大内

やまととくや五月九日立すれど秋美よホヤハキ
左 俊成卿女

ひくらく高れ引馬乃キモルレ小舟下り立す
秋のとくとくや五月九日立すれど秋美よホヤハキ
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ぬ御見立とくとくとくとくとくとくとくとくと
りいて五月とよとくとくとくとくとくとくと
きくとく

立九番

龙晴

吉政大内

すれうのとくとくとくとくとくとくとくとくと
右 俊成卿女

雍大納言實羅

不りとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
左 立九番

立九番

立九番

卷之三

七
七

左持

權大納言室狀

卷之三

九五

指大辭書

今よりまことにすがりまことにすがりまことに
つまむるき月と玉明の元にかまじてゆくや
こ月あれゆふゆされ月すみれやさうるを
ゆちトロトロ乃よしてそれとひきゆくゆく
ひちゆけれちのまへこのいとうれしと
しりこれみてくわせしぬやいづもねほつま
こ前仕はまくくまん侍

成書

九
持

卷之三

七

卷之三

育ぬ乃元小うあつぬほとまひ卯月のひすまひ
右 幸内侍
またよりよもやあわらひやくまくらもくく育とち
左右羽多野とて宣子とあらわらそんじく有
りいきがてゆと左都育平とまく侍

卷之三

卮
樽

右近中將師德

三

惟志明子

戒善

沙汰蓮收

はくまじにうそあやめりうづくま脚落と玉は

右脇

ト野

みのゑのゆづりまどか（まちれとよむなまくわ
左右脇もくくひくととらととすりありけぬ
行いつみけ（きとすりふうやゆくまち
ゆうとけあうんがく）（うしもまよとく
けふからくふくするこてよしこのいとく
まくそく又晴のまとけりき

空善

た晴

ち氏朝

あかじた（まき）乳しほき（月をまくわ

左脇

釐大納言玉基

人手子すまくわわとる日ゑのえにゆわねがまき

右脇

為教朝

穴ねまれひづられ郭ゑ月（く）はままれまちまち
左脇小侍（し）めりなすまれもあますりといふと
不るく侍（し）めりを可（こ）

空善

た

中納言萬經

おもひりすりいゆもまつたをまくきしよ、さ月れどその

右脇

信實朝

時鳥（とき）めいもりもゆくもどりとみだりす育（いく）れ
たとくら（く）らとふうりおせすり先（さ）くえ
ひくゆとゆくね）や右（う）と風（ふう）車（しゃ）ゆくね

翁もよりよみいとすとくわを仕札、右脇

三中一トシ

立書

左侍

右馬總通威

郭ニシテモレバハシムトヨリ日今もるあり

右

左近下將雅

育ノリ行ふれ村上ちりしきなまられ
ちうもとこむとおののえいふ近にば
うよし内あはせしゆうまことにうちわ
にちり育多すましにそおもひとねりゆうと
左きのりとおひし小どつふと村上小ひづね
やくしゆくをもきゆびん貼をけうきよ

立書

左

小將門侍

うりやじを初若とくらうかく今よすが、育
も首うれわきくはらひとひりとうあれ
うりやみけとくらうとの時とほもすて
ゆきよしやかのゆすく晴とく

立書

左

經朝郎

ただめふ里あすてをまきよす育のよえ
名うりやじをうき時ちよく月もくくを
巨乃室あすくうちのどうとすく侍林太
かま、梅もくやくねよじむわすりいそく育やこ小を
てぬわうかうつぶをよおさきしあくわ

観音

右ノ伊豆ノ山ノ

左晴

越前

庵

をらむもくられぬ月をよしとてかねやま

石

宿大納戸為家

水のゆく深時わかれぬふ月をきし御とて
木を三面わせどもんきすすりをあたへ
竹とことさ月をまかくけを下にわめり
火そよいきゆけう（小方ゆきりく）
ありうきしまひ左晴こうやう

平素初秋風

左晴

女房

れどもあ（あら）つく木の葉れどもく風に青、白に

太 小宰相

秋の葉に歌くらむ歌も吹風の歌うむじくよ林葉
たうちと付木の葉にいきまし今もうはの
あくわうりと竹とわけてすまく朝ち
くくとゆうに左晴風がけし色小林うす
ほこして木の葉に歌くらむ歌も吹風
秋の葉秋風うねわるうり竹とくに借竹れ
むいたわ晴

軍毒

左

姫姫

秋のとく先うすれりりん林葉言まつゆえ元

右脇

後藤御女

秋のとく秋の葉にすいとく夕ノ風小鹿のちあ

うちもうさては秋またまより風とすてまむもの
はるかにやれりくらうとほのうれふとて風の秋
とえりうむうくゆふとゆふとくやな秋うとくと
花のうとくタスの風ふるひのせとしきいとん
シシかし女ねうとえてほ小竹むとゆくとく

軍番

た

指大納言通志

太

指大納言通志

まのくじりてやね松風のありてをととあとまよ
たとてもらとせのねのうりうしてすまふ風しあふ
た右月一松風のねすくつまき色むかく
けりと大詫言とねくふとトウの経くく
けりよやえかなわす

軍番

た

指大納言通志

石勝

指大納言通志

す、やうりすれれふ小りうりほぢうすれれふ
まよとみよとくわうそくはれえくわうそくはれえ
たるひ山風近きばよ月吹かはるそくうそくうそく
すくわうそくうそくうそくうそくうそくうそく
てくわうそくうそくうそくうそくうそくうそく
わく山よよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
うよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

卷之三

左
陽

拉夫納公墓

右為教朝臣

早
卷

九

中華書局影印

三

七

新編
萬葉集

卷之三

3

卷之三

甲子

左持

右里繕通本

舊約全書

卷六

在這時，你那光

彼のとて方へみれどもすゞとおもひぬ林の初音
たるてすき、おだくさむがゆうじて太初の聲
くれてもよそよそむかぬと傳る秋風引けの風の
色入る(き)やくまくはれひらりけん

どもくも勝りて竹すまやわる

軍七番

兵部卿有教

かづるれきほりとせうてまく、さうじのと

右脇

井内侍

くふれれきとつまくとすらや風に見る
左をそれれきとつまくとまんとおう(まんとおう)をくた
たれくもとすらや風に見るとすらや風に見る
こひそくはれとれのと風やありまちうくは
候能のまくふれとむろ馬

軍九番

左

近中将師述

行あてあすましのと風見とよとよにれきまし

右脇

雅忠朝長

吹風とえのとりとくらねと身もじ声にれきと
左と同しれきのあすけと身もじととけら
かくとまととまわせらる

軍九番

左脇

深源蓮性

天の川いづれ涼しがつてれると身もじ声にれきやまやん
いれを吹りふるれ風にれきと身もじとれいてえん
たとすくとよとよとくはくはやいとせらふん
せきの貞作ト

辛番

左脇

若氏

うらはまにまじう身りし秋さわとよそもめ

右 む将内侍

ひふて身小もじろをそひてんもひあやめ秋の初月
おとてらむれおのと月をうちわられの初月
おの財貢せ行れまやくねとうちアんこそる
わきりにゆえ晴れきよや

辛夷

左 持 経朝羽

三ろきとれ水けりまやなうんえの川原乃秋れり

石 細孙禪信

かぶ入林のまゝにすれまわれぬま三病の根
た下向とまく水けりまのまほ下やかえをひくを
よ半医草じくとくをいはけにまつわるをひく

佐とまろとまきとあれぬや草れいろ
やこむがつまく竹山古三病の松村松のまゝ
まくいとやと佐とまくとひまくと竹山秋のま
はよやんかくまくとや短もすまとて年がく
竹山吹く風のまくあまくするれてゆむてあ
辛夷

左 越前

うらはまに秋れみ秋のまよと年をうらむる

京技大納言為家

嘆風とあきけ涼くかきすり称やれりに秋や太孫
たうちられれれの心なほづきやゆうや太孫
わらうよのち小ともりとくちう事に侍
半身のまくとくとく

辛夷 海邊月

左脇

女房

さうぬの浦のまやわしきにけり月夜をもあすま

右

小寧相

むす浦たりまういのまはふらむて月夜をもあすま
ゑふれぬぬの浦う葦平朝に旅人を六十余
人の中少ひる本浦ニテ多きゆうふむねにて
幸先つゝくあわづき漁船すとと石子
竹れ今のはまでいそともの「ゆゑ」せす
きつとも、なりつて、わざりしめく乃
道とかくゆくもとすみとくわざくもとす
哥あわぬじくじくじくじくじくじくじく
尼くわくねこくこくちくちくか面月とて、
きく

左脇

辛夷

左脇

太政大臣

右脇

後成郷女

芦うよくちふとれ浪のすくに身すとと浦川れ景前
幸先歌波の波のかすくに身すとと浦川れ景前
歌波の波のかすくに身すとと浦川れ景前
神のうそとと浦川れ景前月波の浦うん
浦波のすとと浦川れ景前月波の浦うん
（あすうんすとと浦川れ景前月波の浦うん

辛夷

左脇

植大納言通忠

波はこよれきむとひとひうそてね秋の月

右

捺大納言實雄

ひくよりすやうすれ浦の波をじとす秋の夜の月
たまふ人へれ私の本海ぢとすとひすあれ
てよ浦くわが太明石れ浦れみ此行どまれ
くゆうととて頃ひ

辛夷

左

捺大納言定雅

もとれ原えいひとくよん波日もうい

右脇

捺大納言弘相

さくとゑだ浦は浦れ夕とよにさくままことせ月
辛夷にトウハラクルふんまついてうとうとく浦は海
もりやて浪小今いのち曉方とれ事に彷彿

玉やれらそひうす月よか波なりのよ
き事よとむといゆるなことからこうゆぬ
よとこにけく右の脇

辛夷

左

捺大納言弘基

秋乃葉月すそんくようけよ、これ浦よとする

右脇

萬教朝に

ますか見えぬれ浦のふのうてお叶氣する秋葉
月すそんくようけよ、これ浦よとする
もく浪アヒムナレ浦を考のうて不吉と則ると
不吉とすらうらひとせんづくやうすやもく
トもくもくとすす浪小心つてあらう向すとせんづ

辛夷

たほよにそとすく夜九月あれまとう明氣湯を

右脇

信實翰臣

いさりひちのあすれまづらはよ下らぬはよせ
左脇左脇すわらきよ月をもんうてかくめうふき
小申はつるあうへ浦をくに舞高舞高へけちよや右
ゆよしきれあすのすりてとすりてあらな
さんせんせん

辛丸

左脇

右主醫通威

おうむせせれ、れ秋の来りゆゑよやてもも脇

右

右近中將雅光

足後

足後まよひまよひくとてのりら

壁清海すらちのまわとねりとみまよと
かくうな今れすとわそよ下あくらんてせか
上小舟の浦をくにむりけりまてわ
やうに方せれ、た力脇

辛夷

左脇

無部卿有教

足後

左脇

キ内侍

足後、まねくがよ雲をみて月次のほよの浦
きよそとえれこゑあくらく海ねずみの月をけ
左矣をりいやれてからくひらびと右脇
れふありからくらくやりつ海をくらく右脇
くらく侍うてえどがいいくゆりぬ徳津や

辛夷

左持

右近中將師徒

右

雅忠朝に

白ぬる壁の間小しき浪のふゝて月をあけ
れのくよ岐うらとくねうらてどもれて是
こた方と今やとくじかてやつらむる御
侍と名えりや

卒畜

左持

沙汰蓮性

海原やあとせうがいのまこと此小清き日中のことうる
石

下野

ありひし浦近く水のままとまととすみ浦より水
うみのままとすとゆうみますとすとゆうみますとすと

卒畜

左持

為氏朝に

附

おの三がいれま、めだまくとよとゆくとけいなめ
卒畜

左持

少將門侍

坐ておりまか海れすと夜さうりうちわ神の月氣
たまとうり井のすといふ行ふあわせたまうりと月
いねぬうとくとくやまくとくとくにけんせと波うあま
れすとまうれすと神乃月いえかわうすとまや左持侍

卒畜

左持

經朝妙見

わすめあやじとくまゆのよもうわすめ、林の良月

右

沙汰蓮性

黒雲氣青きを御所へてはすやむれと見
左下をあてよはりゆくたれ氣薄じる
えふとと先まつむれの本作とぞうをも
書教わる

玄蕃

左脇

鶴翁

明るく晴やわされしに今まく月をしら
右

赤壁大國公考家

移はれまくの浦のありをよおさうの脣
左月れどもとくにふかく傍へきすとれりと
ゆば右肩一冬事あまうに右と絶せまく全
年とくとく半に絶せん左肩ゆ

玄蕃 跡外雪

左脇

女房

すまかまわるもかるとすしまへ壁もあまひう事めのを

右

小寧相

水を深山うちさきみかられぬとひやがくのをしわねのを
左うもまへ壁れをよきとくとまく車にゆを
天うち雪れ明るいそく限るをぬ今きわりい
ゆくしゆ一右肩うちさきじくとくばかりとくとく
ぬゆくしゆ一右肩うちさきじくとくばかりとくとく
えりうとんじくまくとくこう右をんあこだ
右ゆくせれじくまくとくこう右をんあこだ

玄蕃

左脇

不破大臣

雪にまかれてしたむに踏む草木のやうと
いふ

石
俊郎鄉女

俊淑卿女

かわにまつゆの葉をふと見まういとれて右からきめられあは
半喜左角小なりがちかくさうして草木とむけひ
心もなつかしくてほんや左りりしきはるかに深葉
れどいゆき小手ともすうちもくられ
スハ左角

卷首

5

指大統志通思

右晴
指大納言實雄

古文

大紀一卷

さへおのむかひにあらわす花葉文書改序
とくとく方へもよきまれます古道とて事じち
ゆうゆん右の小萩をあつててく、行ぬと申

重モトトモアシテスル初ノリハルノヨリシテ
レニヤシタカヒ

卷之二

拾大納言宣雅

在賜之也。大納言公相

卷之三

まほうの小足法をよむかとの道もばんざのちく者
た書上草を打けて刀を抜くも太鼓が響く
ち小をうて之をうかはれう有るの世を考
究すくもれし有力晴

卷之三

左

おおきな
おおきな
おおきな
おおきな

右
為教朝臣

為教朝臣

雪、ああい、あさらまのり登るもひよ
す。古事記うくはりて、小雪だよりて、
ゆきまれ、足をこかりんといふ。とくにそ
うんぬとおれはうれめくはれはた陽。

卷之三

杞桂

中華書局影印

七

信實郎

9

竹居子為持也

卷二

危
晴

右東晉通志

卷之三

四

梓

小豆も又れつまひにちを下すにあはゆる
峰行乃野(後)くわくわ行小毛せよとおわす

卷之三

卷之四

長沙卿有教

うりとあ、根野の爲あらずとしてあらゆまじ雪の通

草書

右脇

弁内侍

幸りへとふしも害れ小塙うる小野の尼やえ
あるゆくらむとおれ古道をと向すよやゆか
すをふやせよどりとよきうりしきては雪の
手てうちく小壁でゆく上下ねけてりこれんがくともか
くはよう右脇

草書

左持

右近中将仰述

うれすあら野守すんじて雪のいはひの道あわら

左

雅忠朝臣

はかすえ葉ぬらやまくす野中にきてほのまくゆ
志有道ふに乃勸勤の真た右者な右近は筆ノ勝頃も

正日跡や林乃あらむし力くもす忍耐のトム

左

前根大納言為家

あら原かれゆ小野の裏のとこまくはまく従ふよ雪
皆向かうらむく内へん小石く従ふれの小野
手九番恐久恋

左持

女房

れりきよひはねくもくちく年月いそまくも見え

左

小宰相

今しめい小あく年月の氣くらむか種をほまく
たまのむかくくらむくれてとるくくくく
こうゆき右をまきねんふを年月とくがをみ
ちよかよき生もりて仰れうり停小竹とと後

礼をもとめうへてこあへむちせとまき、すとや、
うにうしもくもあは小作、今すとて起しもはく
やあれうもあれ徳のうちつまひ役も行、始而
持の字とゆうらううやけん

牛番

左脇

太政大臣

さの、や、よも、ねむといふくしぬの下りあうとまう

右脇

俊成卿女

祐（てよ）弓、みかき山、落とすりそりと
たゞれぬ落、下り水、いふこと、居と羽毛と
ひききて、とひ、落、くわらひ、おと、歌、歌
ねとすとひ、通、わと、門と、ひだれと、そろとは
ひうちわのふとひはぎり、うすと、貢、供、れり

车番

左脇

沙弥蓮性

トとれ井、まうあ、ア、ア、ア、ぬう、し、言、れ、つ、まえ

右脇

下野

あれ下れぬ、あやまち、家、あが、な、ち、あ、ぬ、ち、あ、ま、こ、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

车番

左脇

為氏朝臣

ま、の、り、と、法、く、る、尼、称、か、る、官、れ、あ、う、と、の、と、通

右

少将内侍

す、よ、ち、と、い、野、の、通、と、と、ま、す、す、す、い、野、の、

左衛門、さよりとれども、れぬて、けんやあくわ、道ま
わいと、とくわくわと、かくわ、小なりすむら、
又文字すう、なきうら、くわゆりすむらと、朝のま
いからいそ、けりす、も、晴けし

左衛門

左持

經朝朝に

あら宮殿、跡はねね、うけられて、今あらね、まほ
ぬみこけて、引(キ)道(セミ)、雪は、すね野中、まうゆき
ひがふあと、まうゆき、まくねの、晴頃、ま

左衛門

左衛門

越前

左衛門

左持

挾大納言通忠

左衛門

右持

挾大納言實雄

トにのこゑす、ものいとすりいとそぞりいのをうに、
まつたと、あり、ほりうすと、とる、愁よ、悔ふを、いえ
てわといの年うへ、かずらうと、所く、けしを、いと、持
こすり、よ、あらわ

左衛門

左持

挾大納言定雅

左衛門

右持

挾大納言公相

あら、内わい、も、と、す、へ、ぬま、あ、れ、れ、れ、れ、
は、ま、

たるはすの夕時雨つゝとすとすんぬるをよ
もあすとしとてきるをとすとすとす
けん左の川下のもうくわれをも情竹下

全番

右 袋大納言玉峯

すとみのちにてなりおれすとせいてすん
右 烏教朝に
水底小うとくもとれ年がへくわいみかとくまほ
左トウモトテスモトモヤドくけん左玉とく
くはうぬいさくわや

全番

右 袋御玄朝

すりきのわれやまひ小いすわいの年とくけふ

右 腹

信實朝に

月少くすりしてされとくもぬても厄れ老とくま
すまたるをねづくらひてやまういすくゆ
をけりや在月少くすりしてれとくらひて
厄の老とくまをすすくわくわくまくまく

全番

右 袋通威

多ふとくわとえりゆいきれ年の年とくわは

右 腹

左近中將雅光

不とじいいく年なし小おゆんま乃浦のあくまく
たむりのとれとれとれとれとれとれとれとれと
くまうれをくわうてゆうてゆうてゆうてゆうて

仲尼後語

卷之三

左持

兵部卿有教

我より生すとれ松ノ葉毛色にいはゆる

三
和

布四種

すりと、やがてうなづきの、いはく、
たれうねとりひそむうちあわせもそ
くらまくつゝともかくはくにけりくよみくよ
うめうめたれやくにちくく傳ふするくよ
侍のよき持とくうふにせし

卷七

七

右近中將府

人情もあらひあつて行はるゝ如き年より我あるべ

七

雅史朝

かくに年をか節へとまつてあるが秋の色あざる
不小葉原とあるゆり乃と称ぬ」や林と稱せと
うむを要す」や丸打称も二行うむゆめに
併れと袖小年を我はんじてよしゆく約をいふ
か勝とやア約をす

卷之三

九

卷之三

右脇
下野
志をもてて身のいやうれや達をまよふものにあらず不景
左の下毛いきいおじきよ宿なりひつてやうる者左
後れ御医ありひそれ仰ればよもつときあれ

「御外侍と右脇とや

牛九番

為氏朝臣

ひちやねよほくましる年月をよみがへる

右脇

右將門侍

たふす神むじにじうちそぬ秋うらよなまき
まゆようふといづる小アト侍と神音にうち
ちうね秋うらよ深くすれおの心ぬく而れ
あれかりりく冠けられ左脇侍りやうや

牛番

左

經朝列

山河乃下りあわてしのことをうきて秋本をかえ

右脇

沙弥禪信

竹とてよまき到み忠草まひ萬のいくせへぬ庭本
た山川乃下りといふ行家すじまさんうとき
うれて侍のあ下ゆどりと侍や又ま
たねうらふ山ひとよひのまゆ萬とくも
くもうらふとよひて侍れどくわうまくや
右方をえぬよへゆ林と歌をよきそも右脇

牛番

右脇

越前

古御のうよ乃高い色小出ぬ引く袖よ／＼うよまく

右

前村大翁言為家

まもむらぬ花乃下れ圓うよまくれ／＼小出ぬかづ／＼日
だまむすまくや侍んを候子月漏つきちらに
うて侍れの直ひくし

九事 痛不遇恋

左晴

女房

ゆきのまつわかふうりゆひよひもれふと

右

小宰相

下れわのあじももくゆうれそそすまはる
たまもとと一鳥の姿まく向わとうれらへゆる
半高多く侍ぬくぢいへりて侍めすと出ま
公は小宣そと下れ右下れわのあじレテ
うとくそもやこゑ侍か下句まうじにち
えをゑん今いわいねじりてにアタシ侍る歌
の手をけほしむの音

九事

太政大臣

左晴

後麻御女

ゆきと浦の海れどりやまうれお
右晴 俊麻御女
ヨリニ東の葉こやてかくもくとまくね道をこれ
瓦のゆくゆくこすとくふかとありとゆを
半高とかりにてとものふりうんへ行りゆつまれて右
ゆきよのことあらひなれい今かあつふゆや
九事

左

大納言通

ゆきよとむりやまうれいのゆる
右晴 摂大納言實雄

ゆきよといふ衣ゆきよすれぬがるをばつとゆくとゆく
たすとらかひんじあやにゆと小太行れんとが東
とひりうんじあつと下れの晴ゆきゆく

卒書

危勝

持大納言宣雅

流可明ぬうれわともうけあひあそわかうれ

右

持大納言と相

ますいねを承仰れうやうやにまちあすにしが防燒りる
左あすかうりう吃もる侵うるのよせん候くん
いとと仰うにう經あすとしてなりいき行うね右

危宿ハシレまくゆきのばー

卒書

左

持大納言と奉

すとまもとひらまきわんわんのうゆでまくに見

右脇

為教朝に

むりのまやかはづまからきりてありあそとがま

卒書

左

牛納言為經

つれをうろきそほははきうけあふくと氣あ

右

信實

まくはうさあきれあよめのうえまよれあまき
かふええとみるどんをこふむれくねりひ
入く洞くほく候くしもつとをうけきもあ
ふよくて一氣あよとけくうとん整小穴
本於くく竹毛とだれ脇行くまくや

卒書

左

右馬傳通取

いゆる事かまねの神をうりてもんみらしのまことまこと

右脇

右近中將雅光

うそもうそ見がうそかく來れども庭てえりや居あゆ
た神のうりよもとねは行うと麻乃枕ねやれ蓬
有とよてひりうちうとのふとほづきゆう
あくつてぬまつてをえあふをもやこひきさむらこつ
じきうしゆくひく孫もや脇

卒九番

た持

兵部卿有教

まめらとまつて戎身ややくのことをうと今度とそこのほ

右

兵内侍

まめりとまつて戎身やそとまね身のうりゆう

百番

左

右近中將師徒

毛くそ不りいよきぬ令うすよわうくみ庭

百番

右脇

雅忠

そのめやまくじようじようてやくら若もよしめ差ばく

凡んぞトくちかく小トクう戎身とうもんをもじひ

まくやくしら右左のうき橋つもうれもくに

仕し切つまき傍うかす仕れまほとすまほ

百番

左脇

油孫連姓

まうとむねにうちあひよそぢくや人かうせ

百事

ト野

むちもと人あきはゆて月を差とせなはほ
たこぬ前ありあるトとと下ゆくゆちま
毛乃とをあらきよなまうすと傳小竹根と今
まことひが種がえりゆ

百事

本新

爲氏朝

ありとがちあういへひあまに夏小まくやすと
可書右

す將内侍

日更にめつゝとく見け竹子やの筋

百事

石

鎌朝朝

石

沙汰禪信

あつまうひちれ社をあひこねうちあらそ
むときやま花ゆりあまねづかられてとまさんわ
左上ちゆみくわは八聲れ鳥の音やひきくわ
ひむじゆくわよどりとどふひくさきやう
と一來あひうちよりてものんあく内(ま)あがるや
太枕(おひき)詠詠かと化者の雨(あめ)いとおほくらむと
百事

百事

左晴

越前

とも房代あけり遠の恨ふむいきとてしもまゆ

石

前指大納言為家

猿さうりんあうそがくもうやうる、巣やねりいあをせん
だき今れせまくはりしてまよしむけん心しきよと
わすれ、ヤヒトモトハくそうけられたの巣かわう
けられおかれ、又廻り

百卉
旅宿風

厄賜

女房

松竹の枝葉は秋の如きの風景
小寧洞

本草綱目

右のう道わがゆきみんかよの身をせんゆる事無
れされぬ風も又ひねふと御りきやくじゆらん
まことあひゆうて旅宿の心事氣なりけめとふゆう
事高いふねづらまよそんすうれきすむれゆ

百六番

存持

太政大臣

見てもれくは、まことに旅宿のいづれをも
カツ

大

後漢書

君のそばにあらやまつてお花風吹く秋のそよがり
風とくわかくゆくゆくはまづむすび方のうきゆ
旗揚のいとうすくちぢらとてしてたぬの事も安
からずともうかくゆくゆくはまづむすび方のうきゆ
ねすくひうとうお姿優れゆゆく持とすわくや

百
卷

增補通志

零落の秋原の秋葉とて、
風蕭瑟とす。

右

樊大納言賓興

幾帳あらうとすこしの旅衣を身につけたのである。
左腰から腰の後ろに合はるゝも旅の心がわざと
さげたるをまことにとも思ふて身の被り物であつ
くおもひふ肩かとゆうとね（五月山の御内々之
よ旅衣の身を身につけたるは旅の身である

百八番

左

權大納言定雅

おれのやうな所はどちらかと云ふ所がござります

有

推納言之相

雲の裏にひまわりの花の匂ひ
やねうさぎのぬるぬるの毛

左

權大師元名集

吹き下り角の像はもじりてこりなみのよし
右 有教廟に

卷之三

卷之三

五

右附
某公書信實加氏

七

信實加

草番くさばん たまごのこころに猿ねのむらをしやすあくとおひそり
石いは さくすまく祠ほをしのひうておとくゆえゆきをむ
へふ風ふう こぢりいあくらんかうねむすすむちー
草くさ たすくえをまくもと川の秋風のくわく風かぜ吹る
せあくまゆうりてふくすくやうくわ

草番

左勝

左馬宮通麻

足川あつかわ

石

左近中將雅光

いつたから故のこのこかくよめんをほりとそにあく風か
草くさ 左あくはくとくとひなあくあくとるこまく
手て まかうとし蛇泳へうすと祠ほよけねとたどら
ほくうけかうやなうるぎれおきひがちよきわは

草番

左勝

兵部卿有教

かくしきて半はんもくわん猿さるうるを神かみ小こみれゆうるな

右

弁内侍

岩いわのゆのぬく骨ほいとをしー猿さるのむらかすく能のう
草くさ なむりきうとく向むかふすきてうくよきうる
穴あなすやすよん左張さう神かみをまもくとくぞくく
わに岩いわの風かぜとせりてゆくとくひてもよはく
ぬじまたわりいてすまくはれをふをかうたの
草くさ まじふやうすくやうん

草薙

左脇

右近中將師述

さもうれぬ小室をしあひすら仰そりたまれ

右

雅忠翁

草枕袴足の床にもし
さもよどりすまきあく風る
厄あらとよしてこそあ用則やけん風小す
い草れ枕差しすふくしふんちあらじや
うて暗燭のすれと下へあらんの音

百丈嵩

草薙左脇

沙汰蓮性

岩の枕れ風

左

下野

ゆき高て一矢やとかねふるふとあく床もあん

たすと下匂り先の向えをとこしらむりしゆれ
い称てきとをとあととくゆく向風を
ゆくはや左何と風乃このぶんと今風を

草薙

左持

為氏翁

うちてゆりやいぢ草枕じまよの底を
右

お将門侍

おもひが皮にかくらみ前まねあり
たの草枕をすすよの小うちでゆれを
かうちのり)称め人あす小室にひとえ
ありすやとおもひすとあくそれいわんのあく
草枕かくくそれこゆつて徒歩にわわ

草畜

左晴

江朝胡

在郷小才より是乃は實より後承をもとくわくもうち

右

沙孫禪信

風吹宿の前草枕半よ様承の事なうすくすく
左振の事とあすうありてすくすくせんねに左をし
すぬ候され事なうすくすくえんねして候とし
吹く風をうそいきこれ事すくすく沙孫
ありて仍れも時仰まくもや

草畜

左晴

詠前

人すきかり承の野へ小アキモ月ヒ風ヒ教焉き

右

前挂大納言の象

草木をむ山風すくすく吹きそい承代被毛を
左風あふゆくも併れも晴

草畜社从税

草畜左晴

女房

秋末乃キスすまほんのよきうこじよ父て清きいと

右

小寧相

岩清水をれて清き城くふが東へんからとよめよ
乃クヌキ納とめうりんとりひいてかすくすく
けりめうきもとてねうらかくねほくねほくん
にすとなりの内すじ承小乞く吹きまうねと
うとそれゆく下をよもやとおいたも今と
おもどりせてせれとおりがわく一神乃行下
さきて志れまくとがまとひまわしひば

あがくまくもひゆふゆびのうめむり全にそぐ
るが今ほどのあつた人のうちふれ
にせきとどづねまん羽小竹もじひふあをそ
はひかすに我志のあらまくあとしとてせうと
御行と我志をあてゆゆゆれりむうきゆめく
がくまくもひゆふゆびのうめむり全にそぐ
るが今ほどのあつた人のうちふれ
にせきとどづねまん羽小竹もじひふあをそ
はひかすに我志のあらまくあとしとてせうと
御行と我志をあてゆゆゆれりむうきゆめく

卷之三

卷之三

太極大成

草木太
後成鄉女

1

卷之三

井の水も川の水もあくまですくねやにいかうとは
大木と若い男と二種類と云ふうちゆゑとあそびわ
けの匂ひが石垣とこづらをまわらすよや組廻れ
のうそそい跡ふくらうやうめな井のじすじ日と
月と山と水と併れ、豈き力持

前大納言通忠

君はさうしてお岩清水をもとめにさうかうそだ
左 摂大納言實雄

卷之三

本草綱目

たるまゝにあらわす。かくして、おもむくは、
左の下に伏せて、まほろまいをばく
仰れてお清めれども、おまづかりはんぢや
ぢや

栗焉

片

擁大納言定雅

御垣れどすれ風のどうわをさよううみのうちせあ先

右脇

前大納言ム相

あらばそいのぶんのうやくちまきりかしぬぐうき
左脇恨をもせよとて税小竹久社ひのむしき
ぬよもゆがつるととせきてねよあくまこふ
高れ下風をとりとめをよけんやすすきとけき
てとらうきふとめくでせるすいまれの小がきに
えいねかくつもやうすれとすけりてむす
うるとくじやのきせられ、勝、定

栗焉

左持

後大納言ム基

右脇れふ佛代うよアラリすみうれね吹風のあめく

右

為教朝臣

けでせふ三笠のうの胡り氣りうきせうくうき
左脇五郎信實貞雖一失可持歟

栗焉

左持

中納言爲経

まこと御いきれ川の宮ねうこしう佛代うよめくも
栗焉右 信實朝臣

あくまゆいよまれ川の宮ね石すいちもいおそそぞえ
左脇よだよのうくはとむすす川宮いふふ
あひて豆度らじいこふよむすふとくは
栗焉右 小林道小林道人を守持

栗焉

右未寫通添

老眼おじめにうつておもん石清水をくぬまれぢよのりま

左

右近中將雅光

五筋の清きものとすして、ヒトハのう神のし安子
アヒル御来神のま通女子内神かく

卷之三

七

卷之三

卷之二

卷之四

我乃子の考うかとす後者の方を以て之に對する
たゞつらきへんは、其の在り處を西野氏の
所也考へて、多くは、の勝

卷之三

右近中將師述

14

右
ちくゆうひの河かまくらゆゆゆゆゆゆ
かくもとさきといふる所もてせらえ
たうれ室爲りうそゑをゆる渺小也記事も
さうりととくはんじらじわほくすにけねと
まよれ浪打のうかくゆくゆくや

卷之三

尾時

波源蓮性

おもてなされど、高きにうなづけられぬ

大

四

在太有石清水山附ひとしもくもう者
外まへよんかば大切よゆやかた力居

夏蕃

左

秀氏朝長

色が見るどもれひそむに松下とむに草すら
左 小野伊
少将門侍

詔使や草井川を下て君よほる多御代をく
左をすなり草とつらじと山出ゆや右せふ
安川をすましもれてゆるよつてえを山代
久きともわきゆくゆめもりいはうめり山川
うきのゆせん社内溝水に及ゆ

栗蕃

左

經嗣幼下

佐吉代松家さん秀う代と弟友ねれ左ひう道

右勝

沙原彈信

五郎もしなれすも草井石清水いゆゆとすもひが能
大令がよまうりのとくへ下りいもひれど
你少りうんとくふくらみくづけゆる
安ふくわゆゆくわゆ

百蕃

左

越前

松木六郎也左方 桂葉に秀うのとせはれえは

右

赤松大納言秀家

三川まみれなれの湯家とひう代は父の代も秀
左をすひ代はすこまうとて相承ゆる多喜
右代ひ代とくらすとて涼須門主を経て

乃よなうてゆううに内事のせどもゆくまふ

あすかうんれもあがむりつる神代ひい川

お風とりて二カ持トシテ

柳代撰者乃あらりと持て一巨剣あれどもまがゆ

キカのれせてもかれはとふくあまくひり

ちきつきゆきは近づいてわざとえゆよと

色うへぬれりまうにすとあふとあうよとせ今

とありせのうもふつも、見えむしやせす中をす

筆とぬきと書きゆるべれまよとまよとまのほ

心のたよじいへとまうりとくとくしゆ、とくとく

うふらひうからともひまよのうきにあすとせ

まちかとらせせられをえがきといそとがり

傳すううすみぢりくとしてゐとつうりやくよ
往稀きもくくはあられかわせすれき持くほの月あくも
さきちあくされ下がくよき近であくがくもくうスミ
金をせまくゆきよの限、昔のうちあくまくくく山
のなはくのううとせきとくおきとくうふかくた
り引くのうくへあくへあくへあくへ

芳

勝九

持一

持

小宰相

道忠

勝四

貞三

持三

俊成卿女

定雅卿

勝一

貞六

持二

寔雄卿

通威卿

勝四

貞四

持四

信實卿

雅光卿

有教鄉

一

貞六

持三

卷之二

師述

四

員二

卷四

雅
東

沙動蓮性

七

貞四

古
文

卷之三

卷之三

勝勝

第二

拾
卷

卷之三

越前

晴

拾一

卷之二

卷之二

長て申上平首御事合事小ゆへく矣
而云人づまきとてちくからむ一中少連性番首て傍と
風を立て肩少シテ小わりて悦美首タメすかにせらあ
と批判クチバシれしよもてひるごて風くづれハラハラま、かほはるやま
てそりとす

一氣の争い今とけさせ判若絶りてひそりあとへりまくわや
まほろかにうめくわが心をはなへしはと建保内裏百首序す

西隱奇人道板圖

すくては小野の聖廟見てひい事うきしらぬとあきて
はとうりひ但方まふはヒ朝レ日をとキ、うちキシム
ヨリ少つまで此ノシルヒの多くあるとモカ集
乃久をつひ卷としかどもたむ事レモ出世假名
去まをまきともしておれもももま、まともそそを
擇リ、うちわゆれてひがくする達ア侍く事レモ全
件集の漢字、いつまちあれ取うえきかくほがと
する。ひ羽を鶴鷗の字ときてうそとげもとがに
ひて承うん時、没字の病にてあらまやうんすて
漢字れり、ひのうち取うえきかくほがとがに
やうすにはあらまやうえきかくほがとがに
くとすも、うち達保内裏れす合小強

時、筆墨をひそめたり。小手に書寫

宣家卿判小山うねれ字は承アラヒと在り、とひと
ひう令判者患癌詠にひそむと有りて、もひと
すとひうと不云不知け字して、うらめらむとひと
用ひれも、い是も又不ぞうるき不うき行ひとひと
モ行ひが今とてうり承小室して、よりて高教朝に今度
判も、ひ奇しげ字と詠ひ、字てひがれを承がんが、かに
行ひあらまよきかくくらじもぬづみすも、もりてうら
ひとひうやんうねりとひとひとひとひとひと
も、もひがうらひうらすも、うらうらひとひとひと
うちかうらひうらすも、うらうらひとひとひとひと
うううううううううううううううううううううう

がんすすまやひるれ、今う一尸あくまにゆく
元仁乃比九條前内大臣、よくよせ首をトモリテ
ゆきと申小前藤大翁言

もとてこあねみをもしりしまひひだりみの風

家長朝長

そし作れはる乃すみれうす夜すうむるも風
ゆくらそとおてゆ心羽うすねほんやかすみれ衣
古今集よりうちわやうて今をとらへんま歌わ
きたゆるねと早春餘室うとれ心羽文すとす、は
首ふゝりへりへりへりへりへりへりへりへりへ
光後入道五首うよしん小首うとぬとむのゆ
ほと為成羽良さうひめの嘉乃衣ミシキテ御ちと
ねほしゆ今之年下にあそびうきをとせまれ

もとてこあせうとおほくゆくわたりとす五百寄合小

伴正力内侍公家合

孤照

春の寒い雪小うちもて尺廣ではほほはほほはほほ
宣教判云厄音雪に打れて、こつら流りと、もてね
のくひれとすとすとすとすとすとすとすとすとす
もやけん連に手たたね百首

丘添二年内大臣家寄合小

約うてわがの漬と尼度、胡日はいく志賀浦波
院行作今事餘連逃亡が尼度羽東汚を大限だ
因み首をば判羽をアス珍、やといふとえられゆるをと
作者、あまりてつまうりてゆた達体のまへいりま
とこ安しゆじや

正見みり野のわくほとしのすとやひうじて
おれりねくこと見ていかゆきやく前達れくかさす
秘事に傳シテアレ候たる中少く定家卿とゆふ
す人アリまことに天高比係のまぐらとしもあら
御字ハモトムと申ゆうて可詠あり度よとせよと
物語り申候承と申ゆう今判者は后とぞうぬゆめ他
教訓の發、實是とは史のしげと、りわいと申すら
ひつともとまかず合小浦し光

昌平年不またんをうへりかゆきやん節の光
利之尼改奉西山と冠を一樹、梢若木と風景已矣幸
益享と申すを承ひ此を申候可詠哉めく定家卿
利小ぬひはつて今は幸ばれど、未だと申すや向ま

海島月

春の月を引えと申すてもほる浪那新
利云不うちは浪の月見て是を仰うこ思意だつてか湖
満のうちありてやあもよす、角何んひまうと難
波波とてすアレゆうく小舟うりを浦ノ月と、これ
すくそととすとととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと

春の月を引えと申すてもほる浪那新
利成卿と申す

かくもよてゆれどすらひのいろへとども、うなぎ
をうして古今六帖ニアレ集すがゆうてはにと
れどはあれ故ふりこゑこゑひおじアヌとぬよて

ひむするとてを海もくとくらは湖をくへと美
すかとてひへんやにわわはんと一方にはて
ほもしもれりやこゆの絵湯毛月毒をもぬく恩詠
賜りてゆるれとすりとこうくよくしてとひは今す
申あ年詠事のくじてひを浦もくゑつちうそく海に
志寶大浦のむきかりと通ぬくとすしゆをぬんせられ
てとくりてとくら浦とくにこせられひにく
一部云恩詠難に下向きぬやまとひふみへたとゆゆうを
ひゆや是之むいそれでひ但よるを序をしてゆる恩詠あ
てとくら浦のむくは今もすりを寄りとくら浦先のう
いとば奇食い

後漢書女
達不夸忘

五月五日あつてのくわを縛りあて

五月あらわすとくを待りあてのどううのなうれ
公詞よどりやくわん今れ作者うれしきを清うの年そ
むちよきみよておとねくら賠をよやくひゆふ音書を合
松山小内兩、ちか詔音本集うそれぢり失といあは
宣良卿利云太字詔音小内兩すねやにゆく行也あ紫
うえれりとひすきもせらじまし侍と又或言合小室紫滿山

そもそもに附て一歩も怠らざる所を、あまねく此繫
家隆卿判云たうづの御事、あはゆつて御を仰る。ゆゑに
御宗のそりに下りておもむりしておひたて仰め今は御とせん
やうじやすくはし御事とせん、まやめがたき等育て
ゆりげきとくよみく作はる判の詠してとくと月れば
うもや写のこしや「但よりあ七日とかとくぬ」とて今ま
にこそもおもむりけあらずとも、いわく、「洞」のうかて
ひと月、かくわうとばかにとあくすりとおもひがふれ
きとく、もくへくうだりの詠とく

一 惠久憲丘寺

惠とのこと、いわゆれや遠き事すまへ年うへある

判の約小後頼寺ひいせんれゆらと判つまづく御とく
うちに寺の年といはれすが塗とくは小つきていめ
にくとくあひくやうえん後鳥羽院建仁元年八月十五
夜正寺合に田家元月

いはす一満かり四の面八月すもんとすとすとおれの御
後京極持政家六首の寺合し寺序惠

慈京卿

うきゆくうきゆくとおれ、送じよきをひてしうやまえ
東山入道持政家義頼延十首寺合小向

三友卿

あまびの御のうりゆのかや遠きゆくはすとまへの
は

りもとまよのてぬれ送つてんやまくまみまほ

般家卿

卷之三

おはしてやじる外をひや送りましゆゑと申す
孤實郎

卷之三

筆をうちぬけり。じやせに筆をや反へて、筆をもどす。
ひこうを玄蕃卿判詞小文。かたむけに済長の筆。かくはんに洞門記
ある。元行の子。作者太常卿。有家。もじ。唐人。やほ。唐人。やほ。まう
えれをよこす。あらゆるがいなんなる。徒行。いた後にりそとく。詠
にゆく。しき。こう判。す。侍郎。おれ。今。す。アモ。や。おまえ
す。よのう。まつ。つけ。わざ。かの。わたり。しき。ふ。お遠。せ。ま。い。や
が。や。に。さ。れ。す。か。わ。や。の。こ。ま。が。で。れ。と。て。萬。ち

すとあわてますとき者こむりやれほとももも宿る方
をもとに行う勅とれて判者にそろまうらんとある
をもとだりひげはれれそれを私をきほしてゆ称をちよびさ
心をえんとすらう今いとくをゆふと蓮せふわあ
自然ふんじゆゆがふてゆ先いを乃てどもえびのみ
次すゆゆうゆうを爲せ爲教示朝に今れものんを通て
又の鄉のふねをうむきけのとく身の冥かし悦ぶ
事にてと余前の人とむりゆあす方よりゆうれど
うもむしれはしゆまことにはまもむか神明といぢり
うもむしゆまことにはまもむか神明といぢり
ゑかくもむしゆまことにはまもむか神明といぢり
きよのでられてゆうれど三五代撰えれ得にむりしわが
にそとゆく事のとやひよもおれす細んじうそとくを

玉念のりとひとゆかりかくううるき方をぬ
絆ゆゆみゆ思ゆるうおおりえひやふし氣と嘗老老毛乃
あすりえ事のとくゆうゆうれ、枝あゆりくとくとくと
判者り徒承ゆて、宣て老の取といふあつねゆとくと
たほくとほなびとくとくとくとくとくとくとくと
ゆ徒とゆうにアとくとくとくとくとくとくとくと
きかむらういづくふえれて煙と忘れぬじゆじやうと
えん得ひ被焉乃後をひきぬくへくはれうこ

卷之三

卷之三

四

中華書局影印

此中嘵歎憶十五首詩合
建仁元年九月十三夜

建仁乙卯
九月十三夜

一題

春在

夏
風

卷之三

卷之五

曉窗

廿一

卷之五

山家古

卷之五

旅宿

卷之五

海鷗

江鴻齋

穿山

宋四友

作者

左國記

卷之三

卷之三

人情實力

卷之三

七言寶月

二番

左勝

親定

刀彌うやひも山のよし夜ハヌトヨヒマツナ
莫太

ミタキシテシヤモニテ派ハモクハモクハモクハモクハモク
左顔右揚ウタカシシフヨウスナシモ

川下庄まの左勝

三番

左

夢よたんねむがと依よまちる春雨りれてまよ

太

勝

雅經

人小すむくし草ひまと波うちつゆまき風

四番

左勝

定家

七代ノ花たらまよ春霞モリモリ夕日曙

太

家隆勅

恨うくろにのむもひうがうらう花と春の夕暮

太平

かうへたりとすいわやとひい花

五番

左勝

前村雪

卒すまほ花すかじうる花本まよの花舟

太

持中伊宣公

もひトやくし聞く事うそううひのまうすと
左平浪

六番 夏臺

五番 左勝

親定

王もいといよわああやめ草にやまうわが小室
太 佐成つよ

もふの夢みむよ夏の夜はあくつみよ季
左平浪しらべりよめよじるわくつ
吉田もたづらく侍と續す左勝

七番

左

宮内

かくらもひとよと夏せはよいとよ色を

古 太勝

有家初臣

多ひあすづくや方ねあす事もあす山杜鵑

左平浪いつよとソラ金よの字ひまつ
つまつや左平浪よ極まつ

八番

左持

持中納言延

新里うちもむきよ

皆

のま

和太

雅經

おほくらうちもむきよ

太平浪しらべりよとよ一むすりと有

かくらふつらふすとよとよとよとよとよと
左平浪よとよとよとよとよとよとよとよとよ

有
附

九番

左勝

左大臣

草すよ夏野りけりまむすね音成したくは露を

家隆勅

時やよやもめ室とふしとくノウトのもひと
太平様不くももくつよ様かと時をもとと
らふを字す。うら原也左平すくつおあする勝

十番

右持

左持臣

夢したがひそあら夏をなかつとす。あらすゆめ

太

定家勅

時鳥をうづくよし便くちる。五月のうちゆづと。

左ノミヒアレ。あらまのめもとくふく
乃く侍とたえくはくとももじだく。侍と
ゆりふといふと。室つよあしかく。侍と
くいのよめく。室で伊とく。侍ハ
十三持とすりかきとく。侍とく

十一番 秋毫

左

親定

すやすよありね宿の床。すくもとくひびの夕風

太勝

前持僧

野自多露。じくもくくてやうれい。津りもく。野あふ。を
た哥。ふとね山のまよ。かづき。いづ古事と思ふ。
さか太平すくと。字まくわくふくと。

侍り 大勝

十二番

左

侍は勅宣と絶

我ははうかとよろこびの神が昌に此へまゐると

大勝

定室朝

えもひきりやわくわまくせのうらひとせつゑ

左

まくわすかすと太平ハ今ゆづらふよ

十三番

左勝

佐成

鳴りて雲井と鷹が波と露が沖のまみづよ

太

雅經

波やなほくねれの方露のかし沖かまくら

太平露のかし沖つよひそいさわよ

孤行とはゆとく沖のよひそよ猶も

よ

吉番

左

左大臣

左冲波のいりやまくら波しづくねれの露

太勝

有家朝

わふりてだまくら露たわざれわざく沖の波と

左平

まくらねれの波のまくら露じづく

左侍とも猶太のわづくわづくまくら

左

十五番

吉

宮内つ

わふすすりと、シナミヨモジはたまがくねは成る。

大勝

家隆勅ん

ももし力は深草の社は霧をあさりまであからむ
左平ひよめうつもといづかよくよあう
太平たのめまやかくせはなく
下さくく侍つ

十六番 爭々

十九

左大臣

やかせはよはよと霜の消つていよやく

太

雅經

霜すすめゆ中ひらゆよぬがりとぎすらえ

太平かれきとくとくといづとく方浦也左あ

封やよやく侍も狂風のくももの

よきよくも侍も太勝つ

十七番

左

勝

宮内つ

とちつりゆのことをもくとくしてゆくとけりやく

太

右家勅ん

夷いわどかくみよみよとく解くやす

左平波のよよよなよてとくとく

よ振れ太きくやよしもくとく

よきく侍もとく者しずくとくとく

よきく九居も平ひく崩しもくとく

もひづるむきく化者ハアシム金より

十六番

左 勝

魏定

うり籬の草もあらへばの徳とよそ
大平の事もよそにすとしよまくしゆ
冬の事といふも注をとしよまくしゆ
左平の事もよほ様也大平の事もよ
さくよほとていつ大平は上句勿論なり

十九番

左 勝

左指揮

徒々千鳥鳴きけ風ノもしかばりよがすよ

大

家隆勅

右とれどもの下の白雪はうたやうと山すみよ
左平ト向くとくもくふ後也大平下の雪
のよし雪といふ山すみよがすくがく

二十番

左

信成

かもうゝ宿のもうゝ枯く跡がふ霜のじうくいづ
太 定家勅

左とくに犹は詠きそよおしこいわかまち下すよ
サ一番 景寧

左

家隆勅

左とくにまんほくまの山のあくつ方晴の方
ゆくよみかかふよもすだりうね左の曉の處

また、さうして、もう少しあつまかれて、胸の辺りが、
ぬるぬるして、熱い。

此有明主之風也

廿二
左勝

魏定

白露未晞之序
其一
有家朝臣

九

布家車

左太と門世猪羅左衛門とよしや

九

晦

卷之三

仁者得之。在半道而失之。彼失之。則失之者有明力矣。

左平日もくらうといつまうりき也

廿四

古文

今ハ氣をもつて浮かひたる一席の御宴
太勝

太

十一

而見侍方をすくふ別れもくはるかに有明のまゝ
左平太が元霧峰腰刀ありとすこゝまでハ
アヤシム事わざと入侍されテモソレ庶歩
さむ様へたあつてよしもやせじつ平井人
主めりきよみの右明い」とみて侍官本事
ひづきはすくと右少佐乃方勝

廿五
卷

九

左大臣

わちもあらず此の日まゝはとてたゞじむごろわゆるアラ
太
片中納言三絶

大

持中集

左手の油紙を西の壁にいじらかす。大方の油紙
廿六番 莫名

九

加

卷之四

左平月のと待ちといつもより頬紅おほきぬ

定家勅旨

卷之五

さうだ太平西京もくうとくじまくは侍のま
人あらわねまくあらわむり

九

卷之二

今更にとまらぬむりとも思ひやうと、さうして夕暮のそ
我太勝 雅經

大
講

雅經

廿八番

七

勝

なまくらと申されタトモ侍生一和歌山の端井月

卷六

わが山の端

はまく待てとたと風ひうちて暮りうなづくらふれ
太平侍ぬとまく風うちてかく宣ふる
きいと左平せ侍ぬとわいふのじね月と
せんとくとくのす勝

廿九番

左

あまむしとくよの床のタマシ波の轟とくよの狂風

三十番

左

萩やくらと風うちとくよ草むらとくよと風をめすと

太勝

伴中幼言公繼

里ふと風うとくよ波う風う雪のそとてのやね狂風

三十（番） 羽翼中立

左

定家朝丸

天さくらぬふのあうつと旅を拂ひあうと雲をれつ

太勝

家隆朝丸

三のうちとくよの野中ばかりばくちと獨の狂風はが

左平せ侍難太平

定家朝丸

左

右家朝丸

ひまくわひひう風ひいじとふようきくすとく幸さも

太勝

雅經

草代しきもひまくとくとくひまくとくの夢ね圓霧

三十三番

卷之六

魏定

大
左大臣
ひめゆり
太平の山の夢を頗幸つるも
侍の左隣サ指す未承ふと時よりよ梨勝

三十回

卷之三

行中納
王繼

見にまじめらうかすいかまうてば三井子と
月太勝 俊成以女
忘れねりよしもひはすあれかほの夢をみゆ
太翁アリふ様也左耳未様モトナシ

卷之九

三

卷之三

はよかに神がわくと、旅ははうむ也アリの山と
たまはる。 室内は
めぐらわリ、ふきともいとりよへよ、すまほだよう、あまもえ
左左ナリ。門は室津山致ひ、うつてゐのいぢよゆと
あらそよこころす。アシタハくや

三十六
卷

山家五

後成以女

人をわざにうふ山里はまのいんむか秋月のあ

太極圖說卷之二 宋陳摶撰

志士の如きは、必ずしも草野に生る者なり。

太平の事はあくまでも

廿七番

九

下りしのきよもんかくまくはりて
山口

九

卷之三

卷之三

すまむせうもみづみふくとくとく有様
ありたる勝山にては御殿の御事

左

七

親定

カトリルに思ひやうしての空巣がどうもすくは見え
五十本
カトリルはもゆめ
右家朝

卷之三

7

卷之三

太平山峯の雪を
すがのそものノハシ

廿九番

十九勝

前狩僧

やまがりや山鳥はあづま夜はすいひもからあつておつ

七 太

雅經

玉玉とやかどりあらしきはれ雪のれ墨ひく承ひいき

四 十番

左 持

行中御言公延

ひきりよまととめぐらわまきよ落び波あがすそくともや

せ 太

宮内口

わがりはくまじり山里よりあひとくのう暮

左 幸

左幸ササ家左幸左幸左幸左幸左幸左幸左幸

四十一番

魏定

左 持

左持左持左持左持左持左持左持左持

太

左大口

まきくとりよもとむるぬ故に昔かうの秋風をすく

左 平

左平かくはみやのとねづくふといづくとく

四十二番

有家朝臣

ゆうじきあくまうまくあれまく靡まよし野あ秋風

太

太

え波やを賣はづきといからと亮形見の袖わざすとく

家隆朝臣

太平すす黒のゆとわらふねやうとアラベキウチ太平
もせき持モ持モヤ

口十三番

左 持

前持僧云

いろアシヨ神トソルのす黒はみかともう御の黒ひと
太 係成ノ女

よしむわそみくはけじあいよく人をきうるせモ

太平すす黒のいさやわらびケテクミモアモリ

坐下持

口十四番

左

持け御宣延繼

ぬよハ康とがはまよと開(ハ)カシム

口十五番

宮内々

ちもくもとあすかまくら西野わくくすくみのよもれ
太 あくもとくらのよもれくらもとくらゆくれ
侍ルモ左ヨリモカマドモトヨ

口十六番

左 持

寛家勅臣

ほしうよとまうとさよのくろは草がねゆもす黒の霜

雅經

人よきよみゆきよかくよよりあひくいのくろ名ゆす
左平玉有ねくめこの化者此深師とあづみ
りてかれね方ノスヌキといつてももやわらか事
侍ルモ左ヨリトモシテシモくろくじゆく侍也

うれしからぬ事ありてはあつたも古事より傳れ
初の文字をひびくへよ後よもすりほ

詩二

卷之六

十一

片叶细长

五
性
也

卷之三

九
亮子をうちの月よりは力どうぞ。汝が
元年からかづけや終り同くよし也や
元年よりかづけや終り同くよし也や

五十九

魏定

有家勅長

思ひの夢を語り（とまことかみれさうよひもげ
左たぢよおづけすとたすんす）
らうじの年とくつろいだる左勝

卷之三

かくすむしのうのいとねねの風す。夢寐ふまきかよひ

太

うふはかみやなまく神の月が
太陽の宮小猿たむ下力

えひづれすましわまくらたと古事くは
初の丸を宝もほよへよ様よすもほ

持とく

口十六番

左 持

佐成久

朝早よんねくそりまよわやの秋はよひうみ

太

宮内

いはくびていてすく曙いはまく月がくくわ
たきうち同宿すくいすむいふゆくわや
きくまくよとハアく付れくわくもくは
くわくはく持とく

口十八番

左 晴

魏定

里すとくよひの夢すみかとけさしたすとくと西郭

太

右家勅

里しづの夢路とくとくとかくもくすとくよひすり
左たちじにすく許すくと大卒んすく
うじはの年とくつとくとくわ左晴

口十九番

左

前持僧

かゑもしもくわのいとね風すく夢路くまとがくく

太

家隆勅

シム従ふくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

太平とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

五十番

左 勝

左太た

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
かくよのゆうみのくわせひくわくあくねうきのあや

かくよのゆうみのくわせひくわくあくねうきのあや
た平せん居すひ下りてうつよほ

五十一番 開始

左

左狩伊

わは路ひくまのりがよて波せよくねくからぬ
侍け御言徳

太

左狩伊

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
左平せん居難たまくとすあくよくはる

五十二番

左

家隆勅免

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
太 勝

雅經

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
かくよのゆうみのくわせひくわくあくねうきのあや
五十三番

左

信久之女

逢坂のゆうてくわよかとそわれと里にほがよてえ
太

空内口

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
太平せん居事とす平古亨とすすり勝う

まくとすあめれいあからむじりのふもはれまく
太平せん居事とす平古亨とすすり勝う

五十五番

左左左勝

左左左

ウタヤミセよと鉢磨けんと袖のふく月

太方家勅使

ルリモと開ひまほ清かとまきと袖は波月

五十六番

左左左勝

五十五番

左左左勝

親定

左左左勝

定家勅使

湊は浦や波よかりひきもて閑よみゆき

五十七番

左左左勝

五十六番

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左左左勝

左平よりすま事か　左平やれてる事か
そと、そり勝つよもや

五十九番

左　勝

左太夫

ひうたれりよもじうはむかず、漁は餘すうちみひづ

太

雅經

ちあきよくあてやはたのじまおなめりいくあ波はえつ
五十九番　やまとといても左猪くわづく狸勝

左下ろ勝

五十九番

左　勝

左持傳

いわいせと海太のねだれをすふ、のゆつをすうや

太

定家勅使

わのきよよめ海太りゆとすひゆくとすやさ
さ左ともちへすま事か

六十番

左

片中綱言と絶

いそかほいせぬ海太りゆとすひゆくとすやさ
太　勝

家隆勅使

りほれひよしよどきとすま事か　左今は平のと並いてく
左今ひととぞくふと今は平のと並いてく
つくりとすま事か　左平ともすま事か　左今は平

は浪風勝　ほげ竹

六十番　討近立

六二 左 勝

左 大 大

初瀨江にてすば浪のいはりとあれどたゞく人そほすれ
五 太 定家勅也

名づけられつゝくらうす波のすあはせとのじられふ
左平いてすば浪ねいのうへよととあやつす
きりなまけのしれふをすりもと付せ

六十二番

左 勝

親定

波すもまとて山河もせよもくすもかどもくかくもま
五 大 俊也

俊也

ふれくねくねくねくねくねくねくねくねくねくね
左平してやよかねせよかねくねくねくねくね

太平

左 勝

空也

わすかげらふるにちむすてがくふくねやせよのこえ

太

雅經

ゆのくまひをくはれくねくねくねくねくねくねくね
太平難卑太平アニ世唐車左平す様とよ

さくからく勝とよア

六十乙番

左 勝

ひめのうけゆ

背けゆ

まくまくはかはまよみよけかまくねくまくせんとは

家隆勅也

千鳥かく御邊のうちく風をくわめてあがて右助のす
たすくもれやすがりた平とくよほじ勝とす

六十五番

左 勝

前持傳

うしすくふよ名龍田の汗波しげねふれどくはくま
太 番

右家勅

音ひけせよりくぬの瀬あまみすとノ人のんとぞもる
太平本平はいとといくとかくに侍へやと亭

ナリ四辻はよ連う侍候と侍

六十六番 宰相立

左

片中印言

左

佐成立

左

佐成立

左平やれどともちあめひとをあつてハ
左平やれどともちあめひとをあつてハ

左

右家勅

左

右家勅

左

定家勅

左

左平はからねどもはまく床と侍と大平

ゆめとくらわりもねやすとくうすとくう

侍下ノ勝ノ宝ヲ付ケテノ

六十八番

左 勝

魏定

早ニ至ムたノ事ニかクいタはアるハ夕暮

大

雅經

詠シてハ吹キてハ汲メてハふくくシ、ハまよすハの風
左平をかたのくりとかきいくりかいるハ風ト
し行くくかがるハ吹キてハ停メてハ休メわせゆハ
らとかはかといでらんはる停メと休と猶左ハる
の夕暮アリシ、ハまよりシてハ吹キてハ勝メ宝メ付ケテハ

六十九番

左 勝

片ハ僧ハ

七十番

左 勝

片ハ僧ハ

七十一番

左 勝

片ハ僧ハ

七十二番

左 勝

片ハ僧ハ

七十三番

左 勝

片ハ僧ハ

七十四番

左 勝

片ハ僧ハ

七十五番

左 勝

片ハ僧ハ

七十六番

左 勝

片ハ僧ハ

七十七番

左 勝

片ハ僧ハ

七十八番

左 勝

片ハ僧ハ

七十九番

左 勝

片ハ僧ハ

八十番

左 勝

片ハ僧ハ

家隆朝代

江

七十一番

左 勝

寛かつ

ひやうひをせきか風すよまのうだすかとひ

左

制

方宣勅あよみ

うちかく草をりうる處あはるがわうれ袖力仕直
袖の仕直艶と侍をなれん向後筋うる
侍アモリテよまほとによく侍アモリテ

七十二番

左

勝

持け御言

ひとりぬよつてよほやしきくすうふうふとてかすか、

左

情

家薩朝丸

ひよをねはからくせわくと軒端のねよけ風をよく
左平アモレ山風アシシカくすうふうふとてかすか
うえ侍左平力はからくのねととひね風か
かくもくとくよくよく侍とらくりうすすく
りりうりり給たす侍ひよもと勝よひアモ

七十三番

左

勝

魏定

ひよはよしにじたまがくらをあくよ此度は風
うたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのう

持便

ひよをふくよしてじすひよかと風の事よまか
すかと事よかと風の事よかと風の事よまか
く侍と左平ヨモリトヒトヒトヒトヒトヒトヒト

れうと行動（思ふから）仕合（うり）からもとす

七十

左

にまくらじよあひかくのれのひせんじよかし
とくに勝
倭かくと

三
左平生集卷之三
行草

七十九
あすとお手をうなづいていたい

わがうちの事

ひかへまほんとくにとけとお勝之室

つまむりへ思ひをのぞむに仕合

七十五番　かのほのふゆ雪はまだやうも山

白妙やく袖のまゝに
露にちりあつしむれ秋風よ

大勝
雅經

はまくらの夜あそびよひてゆくとゆすねの

左平力よりしいのち仲間よくと侍

かくもあらり
太平ノも

之與之相因爲之多也

かし生葉アノハナ
カシ生葉アノハナ

卷之三

左太白

勝十
員立

佐成口

員立

沛鈞石

勝十九
員一

官內口

勝凡詩二
員九

有家

勝三詩二
員十

雅經

勝凡詩五
員六

定家

勝凡詩五
員六

家隆

勝六詩三
員六

確中

勝九詩三
員三

確中紳言

勝一詩三
員十一

確僧

勝九詩三
員三

清潔

雅好

堪能

善學

勤學

好學

樂學

喜學

愛學

好學

勤學

樂學

善學

有無深川河原庄六首并合

仰有

藤原幼氏定家

親定

刻有

藤原親定

一夏

左

汗上支月

定家幼氏

千葉宗子と私川内がいわく
かじりのひの月を

右

親定

まことに月に紅葉ぢる夜やか月

清流川

うけがわるい

よ

左近市

す西行川のまかせ

はりとわくらん

のれの波上

からとおもれ

たへりの

さへりの

二五

ゆき見箇

左

空氣

と風ひ

いの山まくとよほ

のむ行多

のむとつまむ

親定

はれとああや

よとわたりお

すましぬさんわやれどよしや

左ゑう行平中内をゆく

れひまんとぬる御み有り
しわがんり一てありひたへれ

上ふ秋風次うよ若こせな收
火か下すれり生れはりやと

ことはやくさく左乃所泊先

はらかね上ノ初めかと字二

うき翁翁ふとくもがり

三處山家秋風

左

室中

秋風かく成ノ在地称上

多乃こかくう秋風

右

親室

ふもろいはあく日れえのうよて
わきえともなう内へアヌ

右乃子えのこかくうちよ
わきえとくうれよ

まくらかうりこえうそをやねり

守りかくとくねじともかく

左さゆまの戸ひれ打れ衣はよ

せがきくにいわゆ

四百一
初夜

左

身みやにとむかへし

おちり

右
親室

大きめくとくふり失へん

あつきやむ見ゆゆ

左乃前内のみく

仕へ右れ前上りと

がくやとまつてくも

いの豆皮うつ

白吉名勝

玉夏
秋葉

宣あり

立くから内へれもけよじと仕事

よきと多き人の多きせざれ

右

親定

かけ代わすよりのやだとをねと食

たれにれやとくらくとくら

たれにれとくらくとくら

ふ、ま

久遠

之あれ

九

いきよみのうあく山おもてうきへ
やうねがもし乃とすをまと

郭

が

さあまのシえのう

左乃の手紙の文
はるかにうつすらと
可勝

直物語の方を方業の
耶峯下書を写してと申候れど

謝合

者

興

早春

雪中梅

春雨

暮春

初涼

草露

殘月

浦霞

山殘雪

花

卯花

夏月

初秋

窮

苦菜

柳

落花

待郭公

移川

七夕

浦月

秋興

擣衣

霜

雪遠見

愁憇

不違志

恨忘

河

山

紅葉

閒居

水鳥

切烹

別志

曉

關

迷懷

時雨
江冰
猶憇
之志
色逐志

又竹
野旅

寄神祇祝

一是作者

講師

讀師

判者

一番

早春

左方持

あるうちで三輪のかえしやねたち
あるの形とさまるけり

右

足安のやよ城のきれすともし
ありやももくるふるいももく年

二番

西

度

方
縛

引ひきじろ鹿やのあいさせ
とそくわみてんかほ見え
石いし

三番

若菜

方
持

すくえよるさんを春日彌

ほじやちまのうれいもく年

右

いづり、それへつまじうちむ乃
まくとしゆ。すくまのと火

四番

雪中梅

方
ね

あくともアラツコトモの梅枝
もひもとももろよも

右

まくまくしておれとおもひゆうかせよ

おま

おま。山あわち

とくとくとくとくのちしゆうを
きえりふれまよみえ

石

いわやまゆやよきよのうら春む
いへんじゆるはつ

六番

柳

右さ

ま柳のみどりのえようまくまく
みゆれり春めきくゆ

右

えくせばともす柳の枝よの
かずてよ、さみこる夕暮

七番

春雨

右 據

ぬくれた油のやられてもうもの
をよふらしきもとまうあれ

右

もろきりけよけ、ほてじゆの
引揚げよしんの下さすも

八事

礼舞めい

右ね

やまつげともくらり、かよひこむ

いつまづく、もよもれくまく

右

様もやよめ、くられもよめ
ひくはりよあくまくはく

九事

薦すす

右勝

わくらうのあく、のうる
あらひていけるるくいのふ

右

うらをうちるあらのあはれひと枝よ
うらをうちるのいこいもくすのと

十番

舊春

左脇

それより一ほりやまくいとみゆ
こちあはれむわきあら

右

うへえひに思ひ
うめあひのうへえひもしわきあら

十一番

印送

左ね

月うへえひに思ひ
しらうへえひのうへえひ

右

名しおうへえひのうへえひ
しもへえひのうへえひ

十一番

待郎

左 塔

あくまくれりよきすゑは
ぬりてもかじとくねりん

右

わくわくよしもしひき
あふうまき我よ

十三番

龙

え良やすい あともうふの草

十九番

羊宿

左 塔

まくらせゆるまほくまと
あまくふるやくのまくら

右

えよ野やのまよのむみ
みくらくのめ

廿番

鹿

左ぢ

むかし野のあり一葉禁よみすすめ
くちやまもとさを生うれし唐

右

やまとひやいとゆめやまの原はらの端は
ソシキタマツを育うんえふは

大一萬

酒さけ

左ぢ

きよしきよきよきは波浪なみのま情じ

右

舟ふねのりそこのをよそもよそび
あくようとよとよ月つきはよふ

サニ萬

秋あき

左

やまとのもとのうなぞれ吹歌かぎ
ひよしよともよもよの月つき

右

世三番

卷之三

卷之三

舞の火

右卷之二

吹ききらめくのもとむの秋風
のそよぐる香やうす

廿四番

秋興

左

秋もととく
よきのちが

右はその事の
あらまことの
山の事

廿五卷

壽衣

左

猪

まよひの東をじよとめ軍人や
わくさくよ衣持と

右

ありありのこうきは持くれば
ほをひ人ようちれきゆもも
せ六番

左

持

吹く左持ちのもとみ秋風

紅葉

おだすこもるがほやもん

右

さくらしきくそもほて紅の
りんごすやまと紅葉をもん

廿七番

時雨

左

あくらくちねのまれ絶壁て
りひのじく時雨降ぢり

右

勝

さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、

せん萬

霜

左 ね

さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、

れ風

右

さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、さくらんぼの葉をうすくかじりて、

廿九番

冬閑居

右 ね

さくらんぼはあり井の水の秋こむ
さくらんぼはあり井の水の秋こむ

い、もじそりとくよひましれ
い、もじそりとくよひましれ

三十六

江水

左 カ

左カ んだまくひやあそみのり様、構えて
こりうみうこすすじかくらむ

右 カ

右カ やまとてーいよこののはそこかれも
をとくふのくるるのうら風

世一萬

雪遠見

左カ

左カ りとうみのきとつ小嶋とめむむて

右 カ

右カ うけくらへ到もの流れまゆで
けりとくえをむるそらとくわよま

世二番

水鳥

左 カ

左カ さくさくじとふ浦緋の音のそね
のそるはきのあそとくすゑを

右 カ

みちくさのたまゆるはようまほ
むだひそめうとやうふ

世三番

初戀

尤佳

人まされにわきひるの初小れ
やまと袖のつゆけ。うらゆ

右

わきひりとまくひとまくと
かれゆしひるよアモヒ初ゆ

世四番

恩戀

左佳

うきとまくのまくをや
ふくまくられえとまくとれ

右

まくとまくとまくと
あくまくせきてまくとまく

世五番

功戀

丸 ね

うまももをほくあれ花華華

もとはむくふくさく

右

こひりともゆのちやまゆわ後

世と萬

シ憲

たもとくのあれこゑと

テもちもくのあれこゑと

さもひいきまくはれトヨ

右

よしにしちにしちにしちのタモ

世七馬

不達憲

丸

あくまでゆきゆゑのこゑと

おきひとえてはんじくそく

右勝

いはくよこしもひゆうてゆりあれて
ひるまわすとしらうのうふくま

其八番

別意

尤勝

りまさむじまうとひくよのやをち
りきわめんじる様をまさら
右

其九番

逢不含恋

尤勝

りよくたとはせきをくひりのえ
まつりひよのりともあひつけ

右

トモトモうつもとてまふ
スル。そのまわじうりひ

四十番

恨意

九

あさひのこゑに
人れぬる

うき方くらむをじる

石勝

いそぞのうす
いそぞのうす

四十一番

曉

丸ね

あづくらむひき
あづくらむひき

りさよだまゆのまく

右勝

まゆのまくもれ
まゆのまくもれ

四十二番

夕行

丸ね

ゆきゆきゆめは月け乃

うてくせき行ゆ

右

タガハシのわざれやまひびる

四十三番

左勝

河

さくまくさむしをよろこばせ

石

やまふとそんのさくわせ

さくわせのさくわせ

四十四番

闇

左勝

りゆうじゆうじゆうのともやく

笑のともよけよともわる

右

あはてまちやまちのたくて

ともよもよもよともよの笑

四十文書

野旅

左あ

むくのよしはれもそく
けりうきていりよのふやまをそく

右

こくじゆもうちまくの野鳥の声
ちくまくとくを歌のじとくひをさく

四十吟

山路

たお

よゑうるやすみの月は

おもかきみのまのまは

右

四十七吟

左あ

よのよしよしよしよしよしよし

右

いはくとくわくまくらやをのゆ

四十八集

寄神祇祝

卷之三

いはるせんせんてふ上の
まなみあらわしを
石
いはるせんせんてふ上の
まなみあらわしを
神のもとまよ山

寄神祖

新名所舊次合 幷序 班

和舒之趣其義遠矣溫盤觴帝祖字不逞云
素鵝也詔流布於富諸河至璇鵠宮尔津傳數代之
霸王為吾國之昌信人之有情狀不同益間
陛下德侔三皇恩被四民過塵旱設流衡之嵐
聲忼辭朗以加長羅浮柳之星光流明八政
上罔道尚煽人九赤人之橐天下時鳴集衆他詠
詩之極雲上日鱗次上所好下而隨也是以神風五
十銘河之下畔仙天四九玉洞之山方者一素門被
東石傍棲深老眠疏思之路之望。案斯道之事
始自秦漢王侯之不享夷族國之甲區行勝境第

集集万余集。下代勅後家。于國史入雅詠。無漏
銘。錄。然。和良。極。之。林。猶。代。不。書。申。良。源。之。玉。鑿。
信。而。有。銖。何。初。當。國。酒。有。勝。也。有。往。既。名。所。中。之。
名。不。忘。先。祖。許。之。朽。什。詠。之。所。以。耳。目。所。及。視。聽。
所。觸。祖。任。中。丹。之。銘。謹。獻。後。考。之。昌。隨。則。福。考。裕。
文。吃。乾。成。會。不。違。至。愚。之。鄙。懷。自。達。並。將。之。ニ。國。者。
乾。雄。雄。之。列。加。左。右。之。點。秀。開。獨。藻。一。首。之。毫。毫。
將。備。采。棄。万。代。之。急。鑑。而。已。

詩合

題

稀木里 春 泉水杜 茂 岩浪里 秋
打鼓演冬 蕃波里 春 河邊里 茂
是布里 秋 用河 夏 三津律 玄
大山 檀 銘

作者

左

右

道師

讀師

判者

前權大師云為冠卿

一書
梯豆里春

左

神波松大副大鹿羽ト延遠

矢了ノツモモチラヒキタヒモル御多九里

右

太神彦一孫宜基高神と貴

あさくら神代久良名多也トシテ原木の室

左寄白雲山同ノ口主モ御みるん

常れ凡在トセシ

太神代久良名多也トシテイムハ

ちもんあらゆゆくにゆきと一書下ノ侵

二書
左

太神彦一孫宜高神主成彦

左寄うかね

二書
左

太神彦一孫宜高神主成彦

あさくら神代久良名多也トシテ梯豆ノ先カ室トシテ

石外リヤドモトシテ松江正亮太神主延行

移多久シモニテノモトシテ少小ナリテ室石トシテ

右移多久シモニテノモトシテ少小ナリテ室石トシテ

左移多久シモニテノモトシテ少小ナリテ室石トシテ

右移多久シモニテノモトシテ少小ナリテ室石トシテ

三書
左

權少属取内支

弄トソノ月乃えヒテ多のうセリナリトシテ梯豆ノ先

太

法服祭因

事ナリテ少小ナリテ室石トシテ梯豆ノ先

左寄二書の先ノトシテ原木の室

卷之三

右紀の名を承るにあらずの事也

卷之二

右行神社其末回神主成家
孫正北辰天孫里人吉凡ノ子ノ祖ノ子ノ孫ノ子ノ孫ノ子ノ孫

大一念不動心無妄

人善之也。故曰：「德莫大于無私，而無私莫
大於無私。」

卷之三

卷之二十一

大藏經

石井の娘とよのわゆりにておこ
えゆきもちておもてまくをうら

卷之二

六書た
權祿也義本回神主經駒
をめつてまほにせよもゆきてはづくと死の傍手の室

右
大清御國寶

セ番ハサウエイ 権作室葉室回神主連額
七番ハサウエイ 大作師良養

五番ハサウエイ 大作師良養
左後身不廣樂舞也

右上身すとんをすゆまへと矣

八番ハサウエイ 大作師良養

孫玉娘ハナマコ あさまの河原カワハラ おとこをす

九番ハサウエイ

大作師良養

里丸名ハシマニマ あらわにあそびゆきひの宮

五番ハサウエイ 翔不宣卦

九番ハサウエイ

泉木社スミキサ

三番ハサウエイ 定忠

五番ハサウエイ あらわにあらわにあらわにあらわに
一番ハサウエイ 左えはまゆゆよみたてゆんたけ

し力房

成言

大作室葉室回神主連額

延承

まことに石の事は、
まことにまことに、おおむに聖水の事はまことに
まことにありまことに、ゆき下りてゆき下りてゆき下りて

二番 右 云々 乃 番

左 したがふ 佐 佐 佐

さるをまくらにあれどもそんにありますやねん

ちたゆくと字面取つてお歌うに
せうてすまほ役者なりと仰さうれわふ

三番 左 云々 成 家

ゆき下りてゆき下りてゆき下りてゆき下りてゆき下りて

長興

彼のゆき下りてゆき下りのゆき下りゆき下り
たてこまえとまじてゆき下りてゆき
まへ、ちまくの部とあまくしゆき下りてゆき
左第一句不 度多ゆきとむのり、丁度
十三番 さ 云々 民行

初ねぞくうちからまくお部とおまくお部のま
まくお部とおまくお部とおまくお部のまくお部
まくお部とおまくお部とおまくお部のまくお部

三番のゆき下りてゆき下りてゆき下りてゆき下りて

十七
左

經題

まことに此の事は
内親
の事は

重有大意別去之日小方以之

十一
卷之三

タリケラシのアマモ
右のヤモリ良矣

七

良醫

つとむけ三の夜はちくす事のあそび

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. There are several small, dark brown, irregular marks or binding artifacts visible along the right edge of the strip, suggesting it was part of a bound volume.

左近の事は、おまへがおもひたる
如く、おれの心事は、おまへの心事と
同じだ。おまへがおれの心事を知らぬ
ことは、おまへの心事とおれの心事と
が、ちがつてゐるからだ。

十六書　右
多報

右
良恵

たよりいれりをもておけばよし

十七、左 宜忠

右
尚良

めまくらをもひうとそゆられせばかの月とよあわせはるの星
十八宿 来いとすもまくら拂ひき

十八宿 さとむかへ 成言

ちよづけ夜よの月の代やまを河内下野の里
十九宿 右 おとこにまかへ 近江

冬秋の月や四つとて伊豆もかくら里に名ふとし

まきこまきの秋の秋守りまで、ゆきととおつる
十九宿 右 おとこにまかへ しお二のまかへ

十九宿 右 おとこにまかへ りま

もよよれ秋の夕が御け、まかへてりす雲霞の下

三一宿 右 おとこにまかへ 徒内

里人をあぐれまん秋も空はまくと、まくと
天も引まくと御け、まくとまくとまくと
天ニテ、秋の夕が御け、まくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
二十宿 左 おとこにまかへ 成家

月もあはてらまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

右 おとこにまかへ 成家

月もあはてらまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

右
良惠

右
良惠

文一書 さ
太
内

右
良惠

太
内

右
良惠

怡頭

右
良惠

内親

すも月のあらえの秋うきてとる涼、紫雲をたゞと
右勝布紋

文淵閣四庫全書

卷之三

國庫底有三萬貫而未嘗用也。每歲之始，必令戶部

忌自

あすのとじよもよほうはりてうち御の原のえを月の
夜の森の石をもれぬるに御めのなごみを月
すきゆゑくゆくとておはなしのいふておは

大ふくさ
麻

卷之三

卷之三

卷之三

伊留島也すもアリ迎一月として涼風アタマタ度を
シテ近所のいわきをてんねんに娘のうちゆ
手てんれん衣浪アリテ御身一そもてゆまもそ
セキスメノ被もやうす

老の書を
うらがまくねむるにあつていつま月一燈をしきの事より
右の書を

うらうらとおもむけまではれをくじきのよしとすまし
はくはくとくわくわくとくわくわくとくわくわく
とくわくわくとくわくわくとくわくわくとくわくわく

久喜 そ

廣家

子がれをもとぞりよよりは何ん年をもとぞ

左

うらうみぬねをははして高きにさがう興は停ん

タラ

九人左 氏行

うちうれは後をもきてしらまつや写さきを無事なほ

太

良言

元がよのまほをこしむす御のためのまめう月え

右石月料役

三十若 そ

絶頭

翁主おけ行方をか

多難

奥は居たのをもかくアリて後邊も居候を

左争ふる方候たりにれたりゆくへる

三十一、左 そ 宜頭

名もよも涙もぬれとぬままでうきりの多事を辛

入海のうき燒りにしほにねるにうきのく

右 異物取波

武二、左

多難

月夜を境とすもあざれにほの浪のサルノス

左 良恵

わが身を内にすら取のじぬるをまことに。胸はよて
右筋文字をゆきゆきと流したとゆう表だ
三字す。式さこととをもあやせてこりとほよまこ
えぬしむる事うつたて語り

左之秀 藤原宣秀

左 宣志

秋の月は先づ紅へあはとねりそぞろの室

三千秋 左 良恵

尚良

ちきりとけりまでみんねえよとめば後活の里
左秋の月は先づ紅へあはとねりそぞろの室
里と冷ふよしまたおれてまほのくわ
まかといひられみてときともと左と
おとせりかはい角と玉扇とすわる

左 良恵

石

三の里としあふ代けて五度の後活をいそりとすわ
左あさうすにておなつかしてゆる五度

このうちとまごの里をすわるを

方を起れ。否。不ねのう。う。う。う。う。

木々に石を打つ。行家
えりわざりの身のままな作

右
卷之二

えりあらうる春の夜は静けさと五線の室
左右の音楽室
支那の春はあれども春の音楽室
たゞりとすらといふ圓を代ねて春の
支那の春はあれども春の音楽室
御おなじましにゆきひらへばよし

水經 十

卷之三

卷之三

卷之三

花七
石

正大集

二
四
九

卷之三

正を極めぬ

恵顕

右第 八

またのうすかたにまわらひとておしらふを引ひの里

右 内執

青あくまよねのうきよをもどりてう活のとて

不すく名づけにゆきとくちとへゆりがえ

いゆ可病次

九 一 た 定頭

正急すくねじじい乃墨すよ笑ううさなむ

右 良卷

みうちすくねかくと笑うてえしもゆづらうまは里

右

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四 署事

右

五 河邊里

右

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

四書二章 也 事之無也

風雲

すきへり河をまもす清々黒くまでとまふ
右 返り

浦らはて河邊のよしれいもむかへ入るをまます
たゞことうちもたのむじゆとひき

おきひよがわ

四書三章 也 事之無也

徳多

じうなりよ河邊のよしれいもむかへ入るをまます

右

みかゑの河邊のよしれいもむかへ入るをまます

左 下の度をもむかへ入るをまます

四書四章 也 事之無也

徳多

じうなりよ河邊のよしれいもむかへ入るをまます

右

長興

木の木の河邊のよしれいもむかへ入るをまます

左 入にたらくともすらうすらかく

かくにたらくともすらうすらかく

かくにたらくともすらうすらかく

里えもた

氏行

所をもすれまへるをもすらうすらかく

古ふれ

良言

おれう、ものほの里えもたにこまづやけふまづ

たをのまゆしすよほそす、すりや
右ゆうすせもきまくゆくおとて取る

すまつまも力勝

四葉書

左

右

怪頭

冬ね行色ひびきてゆき宿にとて宿泊せん

左

右

奇氣

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里は松を賣

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里は松を賣

罕セ、さ

左

右

奇氣

あまうつるの里てうわての空の里は松を賣

ほまうつるの里てうわての空の里は松を賣

四十番

左

右

奇氣

あまうつるの里てうわての空の里は松を賣

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里は松を賣

良恵

左

右

良恵

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里は松を賣

左

右

良恵

罕九

左

右

良恵

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里

左

右

良恵

アリスミトシムジテモヒタヒタの空の里

左

右

良恵

左太田よりおもてまわすを猶
まへうむりおを

此不爲我所也

卷之二

左より右へ又ある

又後事 さく

卷之三

卷之三

太
然
内

卷之三

此書又名勝原

卷之十二

かづやのよしの長興

なりとひよりのまゝにゆき、いわむすびのつをこなすやうめん

大正の暮に於ては、人間の心をもつてゐる
植物の如きが現れる。

卷之二

本在良惠

大

良玄

の葉ルと、此の手筋トモテ、筆を立てて、下る筆の量

スナラ書 さ ほ取

ナラ書 本

因襲

秋音のすゝめやひめり、そして、夜の歌りは
大江繁も、本在道と並びて、又御歎

スマニ 大

玄顕

セヨウシタマノタチ、と、また、書房有りたる室

本在良惠

良譽

事も、したく、おまつせに、手て筆あり。と、その室
大江よろしく、筆も、しらべて、ひらめくに
めぐるの、がんと、きこて、ゆすり、と、うね
じよおれとて、かみ

本在良惠

良親

あきれと、こ葉えりを、と、その室を、秋の、と、
うじよは、を、と、うじよは、を、と、うじよは、

ふせ書 極本力勝

本在良惠 宣志

右の如きは、たゞその書の序文を

右山人集序 南良

多忙の身よりの有る所を免れられずは、よしとす。
かたむけられずはまことにす。左利きの

午暮
ノ
リ、
神
事
の
事
入
事
を
し
に
は
が
れ
る

七

卷之三

六十七

江華

なまくらのすゝめをうつしゆふくわくをうじ
右 徒然

本

德因

おもむくにあらわすよしのいふはうをひそめりて
たゞいのいふはうをゆるはせりとゆるはせりと

辛亥
左

成家

まことに、この間の事は、

卷

長興

本の事は、おまかせをうながすのである。この事は、おまかせをうながすのである。

正月は水丸あれども、いのちより毛糸
の如きを犯すは強盗也。

六十九卷

卷之三

はのうちのすくいに先後二度て李家に人
左 良玄

卷

卷之三

五首内外科歌

卷之三

七言

卷之三

右　内敷

四
七

2

1

卷之二

七言一書

定見

六

良醫

卷之二

卷之四

卷之三

م

卷之三

乙
七

七言三書 大江信 龍林

卷之三

そちこしらんおの後へほのええてありすまめの秋もよき
右より御見三尚良

右文獻卷之三

まうじやかひのひととくせし地圖をわざと見ゆ
あすたはうだにまへる力勝

七言左司詩集

わざわざしていほうかとゆる人おはなばりにあらわす

延喜

やうやく病の心休むことをして、おゆめがすやすらぎ

卷之三

不仲久而休也。之庶幾矣。不可不黑也。病
久而行和。久之以若丁。乃待

七言詩

卷之三

九
九

早春の物語
左

やうまひことくわく

大約文字下氣也似之矣。又其一也。

卷之三

今度の新作といふもので宣つた

廿六

成家

右

長興

あく病をうやみひりうだらしめうみてれりひとくそくを整
て角槍たてねでとくにまく下馬れても
くも

七十事た

氏行

うじよほなうすくすく音のうれどりひせんほり
左

民吉

のまとがりあひてゆきりまをせんのく音とくらはる
右さきばくわいゆしきへほん
左述情の力とむをすすめん

七十事た

ね頭

うべよれりのうれきと旁丁よみうちまよせむ

太

円融

まくほとつひりそひそゆくわくのうみのえのえ
と左病いはきねよ

七十九、た

定家

秀ゆくわくのうれぬけとくとくはまく

右

良菴

まくゆくわくのけとく割てくとくゆくまくのけとく

凡そそくアケモクとくとくゆく珍字

まくを下りてまくはまくをまく下りて

半居 さ

尊親

吾おもてのまことに不ほの様の段久
太 おもてのまことに不ほの様の段久

もとむかうをもとむかうのそもうちとく書くあまく
たひよれ木のまよがふらひゆき團
木のまよがふらひゆき團

ちよめ ちよめ

かわのまよがふらひゆき團

3,00

